
Angel Beats! ~if~

東条 優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats! -i-

【NZコード】

N9465L

【作者名】

東条 優

【あらすじ】

ここは死後の世界。毎日のように『死んでたまるか戦線』のメンバーと天使が争いを繰り広げていた。そんな世界にやつてきた少年、小田桐アオバ。

最初は戸惑うも自分の歩むべき道を見つけていく。歩んだ先に彼が得るものとは?

祝ユニークアクセス200000人突破!! 読んでいただいたかた、ありがとうございます。

登場人物紹介

登場人物紹介

・小田桐アオバ

？？この物語の主人公。武器はショットガンとナイフ。生前の記憶がない。

・遊佐

？？この物語のメインヒロイン。『死んだ世界戦線』のオペレーター。無表情で淡々としている女の子。

・ゆり

？？『死んだ世界戦線』のリーダー。愛称はゆりつペ。戦闘能力は天使と渡り合つほど。

・天使

？？『死んだ世界戦線』にとつての敵。学園の女子寮に寄宿している。

・音無

？？原作の主人公。名字を除く生前の記憶を失っている。

・日向

？？『死んだ世界戦線』のムードメーカーで最古参。青髪の青年。

・高松

？？『死んだ世界戦線』の参謀役。？メガネを持ち上げる仕草が似合うが、本当は馬鹿らしい。

・野田
？？『死んだ世界戦線』のメンバー。ハルバードを使う。かなりの馬鹿。

・椎名
？？『死んだ世界戦線』のメンバー。「浅はかなり…」が口癖のクールな美少女。

・藤巻

？？『死んだ世界戦線』のメンバー。長ドスを持つガラの悪い少年。

・TK??

？？『死んだ世界戦線』のメンバー。謎の男。趣味はストリートダンス。

・松下

？？『死んだ世界戦線』のメンバー。柔道五段のため「松下五段」と呼ばれている。

・大山

？？『死んだ世界戦線』のメンバー。特徴がないのが特徴の男の子。

・竹山

『死んだ世界戦線』のメンバー。眼鏡少年。ハッカー。

・岩沢

？？ガルデモのバンドリーダー。ボーカル&リズムギター担当。

・ひさ子

？？ガルデモのサブリーダー。リードギター担当。

・入江

？？おどおどした小動物キャラ。ガルデモのドラム担当。

・関根

？？イタズラ好きの問題児。ガルデモのベース担当。

・ユイ

ガルデモの大ファンの少女。八重歯が特徴的。

・直井

生徒会副会長。ナルシストな少年。

・鶴野鉄平

？？オリジナルキャラクター。ツンツン頭の男。関西弁で話す。女の子に目がない。

登場人物紹介（後書き）

話が進むにつれ、隨時更新していきます。

追記

ユイ・竹山・直井を追加しました。

第1話「死後の世界」

「…………」

目を開けると、丸い月が視界に入ってきた。満月だ。月が見えることから夜だと分かる。

仰向けの体勢のまましばらく空を見つめた。

後頭部には冷たいアスファルトの感触が伝わってくる。

まだ頭がボオーッとしている。

「ここは……どこだ？」

首を傾けて周りを見渡す。学校の校舎のようなものが見える。うちの学校か……。そう納得しようとしたが、俺はこの場所を知らない。

そもそも何で俺がここにいるんだ。

記憶を探つてみるが何も思い出せない。

すると、校舎の方から銃声が聞こえてきた。

「……何だ、一体？」

ゆっくりと起き上がる。

自分の姿をよく見ると俺は学生服である。しかし、この学校の制服ではない。

「……あつ、目が覚めましたか。」

突然の声に後ろを振り向く。

そこにはポーテールで制服姿の小柄な少女がいた。少女は *key* コーヒーを片手に持ち、こちらを見つめていた。

キレイな人だなあ・・・。無表情なのがどうかと思つが。

「・・・いりますか？」

少女はもう一本 *key* コーヒーを取り出し渡してきた。

「ありがとうございます。」

俺は素直に受け取り、一口飲んだ。普通に美味しい。少しの沈黙の後、

「君は誰なんだ?」*は* じなんだ?」

すると少女は、「・・・人に聞く前に自分のことを言つのが礼儀です。」*こ* もつともです。

「すまない。俺の名前は・・・えつと小田桐アオバだ。」
何で、俺は今、名前がすぐに思い浮かばなかつたんだ。

その少女は機械的な口調で、

「・・・私の名前は遊佐です。」*は* じでは『死んだ世界戦線』のオペレータをやつっています。』
『死んだ世界戦線』・・・なんじやそりや。

「『死んだ世界戦線』って?」

「現時点では『死んでたまるか戦線』と名乗っています。まあチ一
ム名みたいなものです。」

言い終わると遊佐はコーヒーを一口飲んだ。

遊佐の顔は相変わらず無表情である。

「・・・2つ目ですがここは死後の世界です。つまりアオバさんは
死んでいます。」

えつ？俺が死んだ？何を馬鹿な・・・。

そう思い遊佐の顔を見るが嘘をついているよつこには見えない。

「・・・本当なのか？」

「・・・本当です。」

遊佐の言つた言葉をすぐに受け入れることが俺には出来なかつた。

第1話「死後の世界」（後書き）

いかがだつたでしょうか？

次の話から内容を多くしていきます。

なるべく早く話を進めていく予定です。

これからも読んでいただけたら嬉しいです。

第2話「よつひんか 死んでたまるか戦線へ」（前書き）

第2話書きをました。 ではでは始まり始まり～。

第2話「よつひんか 死んでたまるか戦線へ」

遊佐から死んだと告げられて、しばらく沈黙が続いたが、

「分かった。」

俺はその言葉を信じることにした。

「・・・すんなり受け入れましたね。」

遊佐は意外そうに言つた。

「まあな。俺はこゝを知らない。だからお前の言葉を信じるしかないからな。」

俺は空を見上げて言つ。

「それに俺にはとこながいの記憶が抜けているようだし。」

「・・・記憶が抜けている？事故にでもあったかもしません。まあそのうち記憶も戻るでしょう。」

そう言つて遊佐は付けていたインカムに手を当て、何処かと連絡をとり始めた。

「・・・こちら遊佐です。ゆつっぺさん。新しい人を見つけました。場所は中庭です。」

『遊佐、中庭にいるなら早く撤退しなさい。そつちに天使が向かってきているわよ。』

そういうとゆつっぺと呼ばれていた相手が一方的に通信を切つた。

それにしても天使ってなんだ？

困惑していると遊佐は、

「・・・アオバさん、緊急事態です。ここから撤退します。いきなり手を掴んできた。そのまま引っ張られる。」

「おい、ちょっと・・・。」

俺の叫びもむなしく、校舎に連れて行かれる。

階段を駆け上がり、3階へ行く。時折、銃声が聞こえてくる。突然遊佐が止まった。

「どうした?」

俺が聞くと、

「・・・ここまでくれば安全です。」

遊佐は手を離し、窓から外の様子を眺める。

俺はその横に行き、

「天使って何なんだ?」

その質問に遊佐は、

「アレが天使です。」

と言つて指を差した。その先には1人の少女がいた。

「どう見てもただの女の子にしか見えないのだが・・・。」

「・・・見かけに惑わされでは駄目です。」

天使と呼ばれている少女の歩く先には数名の男子生徒がいた。各々銃を持っている。

その生徒達が一斉に銃を構える。

「おいおい、たかが女の子1人相手に・・・。」

バンッバンッ・・・

乾いた銃声が響く。

数発の銃弾が天使に当たり、学生服が血で真っ赤に染まつていく。

天使はそんなこと気にする様子もなく、どこから出したのか剣を振り続けている。

「化物かよ・・・。」

思わず呟いてしまった。

すると男子生徒側にさらに数名が助けに駆けつけていた。

一斉射撃が続く。だが天使には一発も弾があたらない。天使はバリアを張つているかのように銃弾を弾き飛ばしているのだ。

その時、弾き飛ばされた銃弾が遊佐の近くの窓ガラスに飛んできていた。とつその判断で俺は遊佐を突き飛ばす。

「！！」

遊佐の驚いた表情を見たのは初めてだが、今はどうでも良い。

パリン！…ザクザクザク・・・

見事に窓ガラスが割れ、破片がモロに俺に当たる。痛い。物凄く痛い。

遊佐が駆け寄つてくる。

そこで俺は意識を失つた。

目を覚ますと、遊佐がこちらを覗き込んでいた。

「あれ？俺はガラスでザクザクじゃなかつたのか。

何で生きてるんだ？痛みも全然感じない。

それに傷跡もない。

そんな俺をよそに、

「ゆりっぺさん、アオバさんが目覚めました。」

「そう、アオバ君お目覚めはいかががしら？」

「こは校長室がどこかか。俺は体を起こし、声のした方を向く。

そこには、ほつそりとした足に痩せ型の体系、紫の短髪とそれに結んだリボンが目立つ女の子がそこにいた。

「よつこ、死んでたまるか戦線へ。私はリーダーのゆり。」

「小田桐……。」

「小田桐アオバ君でしょ。遊佐から聞いてるわ。」

「はあ、といつよつ何で俺は生きてるんだ？」

「遊佐から聞いてない？まあいいわ。こは死後の世界。こでは死ぬことはないわ。たとえどんな致命傷を負つてもね。死ぬ痛みは味わうけど。」

そうなのか。信じるしかないな。だって俺はいま生きているのだから。

「他に分からぬことがあるなら何でも聞いて。」

「じゃあ一つ。何でお前らは天使と戦っているんだ。」

「あたし達がかつて生きていた世界では、人の死は無差別に・無作為に訪れる物だった。だから抗いようもなかつた。だけどこの世界では天使に抗えれば生き続けられるのよ。」

ゆりは真剣な顔で言つていた。

「天使に抗い続けてどうするんだよ？」

すると、ゆりは胸を張つて答えた。

「天使を消し去り、この世界を手に入れるのよ。」

「そんなわけだから、死んでたまるか戦線へ入隊してくれないかしら。」

入隊？なぜ？

「なんで俺は入隊しないといけないんだ？」

するとゆりは顔を近づけてきて、

「あんた馬鹿！？まじめに学校生活送るつもりなの？天使に消されたいの？」

「消されるってどういふことだ？」

「簡単に言えば成仏みたいなもんよ。まじめに学校生活を送ると消

えるのよ。」

「で、ここ以外は安全な場所はないわよ。入隊するの？」

「うなつたら仕方がない。乗りかかった船だ。」

「分かったよ。入隊する。」

「よろしい、改めて歓迎するわ。」

「彼女は命いっぱいの笑顔で、

「ようこそ、死んでたまるか戦線へ。」

「うひして俺の非日常が始まった。」

第2話「よつゝや
死んでたまるか戦線へ」（後書き）

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第3話「個性的な戦線メンバー！」（前書き）

では第3話の始まり～

第3話「個性的な戦線メンバー！」

「戦線メンバーは私と遊佐以外にもいるけどおにおい紹介するわ。」

そう言つてゆりは学生服を渡してきた。

俺がいま着てている学生服とは違う。

「学生服が違うようだが。」

「それは一般生徒用の制服よ。こつちのは戦線メンバーの制服。」

ふと思つた疑問を口にしてみる。

「一般生徒も死んだ人間なのか？」

「違うわ。彼らはノン、いわゆるノンプレイヤーキャラクターよ。始めからこの世界にいる模範生つてわけ。だから授業や部活をやっても消えないわ。」

なるほど。

「話は戻すけど、戦線のメンバーは男子はベージュのブレザーを、女子はこのセーラー服調の制服を着てるからすぐ分かるわよ。」

ゆりは自分の制服を指差しながら言つた。

「あとこの部屋に入る合言葉を教えておくわ。『神も仏も天使もなし』よ。」

「一応私のほうから戦線メンバーには伝えておくから、メンバーを見かけたら声をかけるように。後のことば遊佐、あなたが面倒を見てあげて。」

「・・・分かりました。ゆづヶ原さん。それじゃあ行きましょうか。アオバさん。」

そつと音で遊佐は校長室を出て行った。俺もその後を追つた。

校長室をでたあと事務室へ行つた。

奨学金の手続きをするためにだ。この世界では誰でも奨学金がもらえるらしい。

奨学金の手続きを終え、食堂へ向かつた。

「IJKが食堂です。」

「JJK普通の食堂である。」

「私達は餓死する」とはありませんが、それでもお腹は空きます。そんなときによじこを使つてください。」

相変わらずの無表情で話している。

「それと満腹になつたからとこつて満足しないで下さい。消えてしまつことがあるので。あと麻婆豆腐はあまりお勧めできません。」

麻婆豆腐はあまり美味しいのか。

「分かったよ。」

そういうつてもう一度食堂を見渡した。

するとまだ1時間目の授業中なのに肉づじんを食べている学生ヒップを食べている学生がいた。

肉づじんを食べている学生は大柄のがつちつとした体型の男だ。

「おお、新入りの小田桐か。俺は松下だ。ようしくな。」

松下は俺に握手を求めてきた。俺もそれに答える。

「・・・松下さんは柔道5段なので敬意をもつて『松下五段』と呼ばれています。」

横で遊佐が言った。松下五段か。みんなからの信用は厚そつだ。

ピラフを食べている学生の側にはなぜか長ドスが置いてある。
「ようしくな、ボウズ。」

「ボウズじゃねえ。」

コイツの第一印象はヤクザだな。

「・・・彼は藤巻さんです。」

遊佐が言った。

21

「！」は図書室です。」

意外とたくさんの中が置いてある。あたりを見渡すと戦線メンバー
が2名いた。

眼鏡をかけた青年と普通の男の子だ。俺は近くに行き挨拶をした。
「新入りの小田桐アオバだ。ようしくな。」

すると普通の男の子が、

「ようしくね。小田桐君。」

眼鏡をかけた青年もそれに続き、

「ようしく。」

と眼鏡を上げて言った。

横では遊佐が、

「・・・特徴がないのが特徴の大山さんと、眼鏡をいちいち上げますが馬鹿なのが高松さんです。」

ふうん。つて高松つて馬鹿なの？

廊下を歩いていると、赤いバンダナをつけた一人の男が踊つていつた。

見るからに怪しいやつだ。制服からして戦線のメンバーなのだろうが。

「Let's dance」

いきなり近くに来て言った。

「踊らねえし。」

「・・・彼はTKさんです。今のはTKさんなりの挨拶です。」

遊佐が言つた。TKを見る遊佐の目は少し引いていた。

「TK？それが名前なのか。」

「本名は誰も知らない謎の人です。」

謎の人つて・・・。そんなヤツが戦線にいて良いのか？

一通り周つた俺達は、

「・・・もうすぐお昼ですから食堂に行きましょう。」

遊佐の提案で昼飯を食べに行くことになつた。

時刻は12時30分過ぎ。そろそろ4時間目も終わるところだった。
食堂に着き、券売機の前行つて気がついた。

俺、金持つてねえ……。

「アオバさん、お金がないのですか？」

遊佐が自分の財布を出しながら言った。

「ああ、そのようだ。」

俺が困つていると、

「……私がおじつましょひ。」

「えつ！？ 良いの？」

「……」の間助けていただいたお礼です。」

脳裏にガラスでザクザクに刺されたことが蘇る。

食事前に思い出すものじゃないな。無理やり頭の片隅に追いやる。

「あつがとよ。」

俺は比較的値段が安いきつねうどんを選んだ。

遊佐はラーメンを選んでいた。

2人で近くの席に座ると、

「となりいいか？」

横から声をかけられた。

「どうぞ。」

隣に座つたのは青髪の青年だ。この人も戦線の制服を着ている。

青髪の青年は、トンカツ定食を食べている。

「お前見かけない顔だなあ。新入りか?」

青髪の青年は聞いてきた。

「ああ、小田桐アオバだ。」

「俺は日向だ。よろしくな。アオバ。なあ椎名新入りだぞ。」

いつの間にか日向の目の前には首に長い襟巻きをした美少女がいた。

「気づかなかつた。」

思わず咳いてしまつた。

「浅はかなり……。」

長い襟巻きをした美少女は和風定食を食べながら咳いた。

「この人は椎名さんです。『浅はかなり……』が口癖の人です。」

遊佐はラーメンを啜り終わると言つた。

昼飯を食べ終わると、遊佐の通信機に連絡が入つた。

「……アオバさん、校長室へ行つてください。ゆりっぺさんが呼んでいます。」

遊佐からそう伝えられ校長室へ向かつたのだが、

俺より一足早く校長室の前に来ている人物がいた。

ハルバートを持っている男子である。

彼は真っ直ぐ何もせずにドアノブに手をかける。つてあれ。合言葉を言わなくて良いのかな？

その男は窓を突き破り吹っ飛ばされていった。大きなハンマーで飛ばされたのだ。

俺は合言葉を言つて中に入る。中には数名の戦線メンバーがいた。

第3話「個性的な戦線メンバー！」（後書き）

いかがでしたか？

次回はアオバにとっての初めての作戦です。

次回もお楽しみに。

第4話「天使エリア侵入作戦」

「ハルバードを持った男がさつき飛ばされていつたぞ。大丈夫なのか？」

一応ゆりに報告しておく。だがゆりは、

「ああ、野田君ね。いつものことだから気にしなくて良いわよ。」
あつさりとした回答。他の戦線メンバーも口々に、

「アホだ…自分の仕掛けた罠に引っ掛けられてやがる…」
「バカだなアイツは。」
「浅はかなり…。」
悪口を言っている。

「アオバ君、これ。」

ゆりは俺に一丁の銃を渡してきた。

「ショットガンよ。威力はまあまあよ。」

そういうと突然、近くにいた高松に向け発砲するゆり。

叫び声をあげる間も無く床に崩れ落ちる高松。かわいそうに。
あと接近戦用にナイフも渡しておくれ。」
何食わぬ顔でゆりにナイフを渡される。

「ああ…どうも。」

それらを受け取った。そのときの俺の顔はきっと引きつっていただ
ら。

ゆりは校長が座るような椅子に座つて、ベレー帽を被りながら言つ

た。

「全員集まつたようね。それでは今回の作戦を発表する。」

この場にいる全員の視線がゆりに集まる。

「今回の作戦は『天使エリア侵入作戦』よ。」

天使エリア？なんだそりや。

「天使エリア？」

他の戦線メンバーも困惑している。

「はつきりいつて、天使と今そのまま戦つても天使を消すことなんて出来ないわ。そこで・・・。」

ゆりつへは何かの鍵を取り出し、

「天使の情報を集めることにしたわ。場所は分かってるから大丈夫よ。」

自信満々に言った。

「今回の作戦メンバーは日向君、大山君、松下君、TK、藤巻君、野田君、それとアオバ君。」

「俺もか！！」

「ガルデモは今回はなしよ。それじゃあオペレーションスタート！」

俺達はいま『天使エリア侵入作戦』を行つてているのだが。

「何で、女子寮なんだよ…………」
思わず叫んでいた。

「ちょっと待てることわよ。」
ゆりに注意された。

「すまない。」

現在、藤巻とＴＫは寮の外で見張っている。
2人には天使が来たらすぐ発砲するようにゆりが命じている。

「じゃあ入るわよ。」

ゆりは天使の部屋を鍵を使って開けた。

その瞬間、松下五段と野田が先に中に入った。
数秒後、中に入つて良いと合図があつたので俺達も中に入る。

てかこれって不法侵入じゃね。

そんな不安をよそにゆりたちは部屋をあせくつしていく。

日向はベットの下を覗き込んでいた。

松下五段と野田は入り口で見張りをしている。

大山は誤つて天使の下着入れのタンスを開けて顔を赤らめている。
ゆりはなにやらパソコンをいじつている様だ。

するとゆりが突然、

「あ～もう分けわかんない！…」
と言つた。

「どうした、ゆりつべ。」

日向がパソコン画面を見に行く。

「パスワードが必要なのよ。お手上げだわ。」
ゆりががっかりしていると突然銃声がなった。寮の外からだ。

「撤退するわよ。」

ゆりの指示と共に全員速やかに部屋から出る。
ゆりが部屋の鍵をかけ終わると寮の入り口とは反対方向に走り出す。

「そつちつて逆方向じゃねえのか。」

俺が聞くと、

「あんた馬鹿〜！入り口から出たら天使に見つかっちゃうじゃない。非常口から出るのが得策よ。」

ゆりは走りながら言った。

「なるほど。でも野田は入り口のほうに行つたぞ。」

「アホだ。」

日向がつぶやく。

俺達が非常口に入ると同時に野田の断末魔の叫びが聞こえた。

『天使エリア侵入作戦』は失敗に終わり自分達が馬鹿であることを知ったゆりは新しい人材を探すことにした。それも頭の良いヤツを。遊佐と一緒に勧誘するために校舎をうろついていると、音楽が聞こそんなわけで俺達も勧誘するのを手伝うハメになつた。

えてきた。

「なあ、」の音楽は何なんだ？」

ギター や ドラム の音が聞こえてくる。

「・・・これはガールズ・デット・モンスター、略してガルデモの演奏です。ここでは人気のあるバンドです。死んでたまるか戦線の陽動部隊でもあります。」

「ふ〜ん。」

聞こえてくる音楽はとても心に響くものだつた。

これを演奏しているのがどんな人たちなのか興味がわいてきた。そんな俺の心が読めたのか、

「・・・少し見ていきますか？」

遊佐が提案してくれた。

「いいのか？」

「少しくらい大丈夫でしよう。」

そういうと遊佐は手を握ってきた。

柔らかい・・・女の手ってこんなに柔らかいんだ・・・。

つて近くの教室に行くのに手をつなぐ必要つてあるの。俺的には嬉しいけど。

遊佐に手をやる。いつの間にか遊佐がこりこりを見ていた。

「・・・いやらしいことを考えていましたね。」

全部見透かされていた。

「君が新入りの小田桐か。私は岩沢まさみだ。ボーカル&リズムギターを担当している。よろしくな。」

そういうのはクールなイメージの女性だった。

隣で遊佐が、

「・・・岩沢さんは陽動部隊のリーダーです。」

と言った。

「じゃあみんなを紹介する。左から順にリードギターのひで子、ラムの入江、ベースの関根だ。」

「よろしく。」

目が怖い女性だな。

横で遊佐が、

「・・・ひで子さんと麻雀をする時は気をつけに来てください。麻雀？気をつけろ？どうこうことだ。」

「うわあ～。新入りだつてよ。しおりん～」

そういうのは小動物を思わせるような女の子だった。

「みゆきち、意外とかッコイイよ。彼氏にしちゃいなよ。」

金髪ロングヘアの女の子がみゆきちと呼ばれていた子とほしゃいでいた。

「・・・みゆきちと呼ばれているのが入江さん、しおりんと呼ばれているのが関根さんです。」
遊佐は、はしゃぐ入江たちをよそに冷静に彼女らを紹介していた。

第4話「天使エリア侵入作戦」（後書き）

皆さんいかがでしたか？

次回はオリキヤラが出ます。

次回もお楽しみに。

第5話「新入り」

ガルデモのメンバーと数分会話をし、再び勧誘するため校舎をうろついている。

すると前方に倒れている男の姿が、髪の毛をシンシンに立てた男である。

「・・・新しくこの世界に来た人かもしません。」

「とりあえず起こう。」

俺達は寝ている彼に近づく。俺は起こうーと言っているのだがなかなか起きない。

遊佐は男の顔を覗き込んでいる。

一向に起きないのでなんだかムカついてきた。
そう思い、拳を作つて男の腹、それも鳩尾の辺りに力を込めて振り下ろした。

ドスッ・・・。

返事がない。ただの屍のようだ。

「・・・アオバさん。やりすぎだとおもうのですが。」

「遊佐は気にしなくていいよ。こいつはただの屍だから。」

すると突然、屍が起き上がりつて、

「誰が屍じやボケえええーー！」

その叫びと共に俺に殴りかかってきた。俺はギリギリでかわす」とに成功する。

「ハアハア・・・。」
「はゞ」だ?

あたりをきよろきよろと見渡す復活した男。

その男の動きが止まつた。

「その田線の先には、
「むッチヤきれいやつあ。」

遊佐がいた。

そいつは無理やり遊佐の手を握ると、

「へい 鶴野 鶴野鉄一
表に「へいの元住
黒いスカーフ

それにしても会つて早々戻してゐるつて遊佐も困つてゐるぢやないか。

顔を赤らめて・・・ええ～～～！！

顔を赤らめている！！いつも無表情の遊佐が！！

これはこれで珍しいものを見れた気がする。でも顔を赤らめた遊佐は可愛かつた。

「・・・校長室に行つてください。たくさんの女の子達があなたを待つていますよ。」

「ホンマか。ホンマなんか。ここはワイのパラダイスや。」

関西弁丸出しの鶴野はかなり喜んで校長室に行つた。

「鶴野がいなくなると遊佐はインカムを使い、
「・・・ゆりつぺさん。そつちに天使の手先のツンツン頭の関西弁

の男が向かっています。校長室の前で迎撃お願いします。」

そういうて通信を切つた。遊佐の顔は無表情に戻つてゐる。

「今までの行動つて……。」

「全部芝居です。顔を赤らめたのも芝居です。」

そういうて顔を赤らめる遊佐。

全部芝居だつたのか……。遊佐つて意外と怖いな。

俺も会つて早々あんなことしてたら……。考えるだけゾッとする。

その数分後、大量の銃声が校長室の方から聞こえた。

「……ワイは仲間になるでえー。」

縄で縛られて身動きの取れない鶴野が言つた。

その周りを俺とゆりと遊佐と椎名と野田と日向が囲んでいた。

「ゆりつべ！－こいつ怪しいぞ。変な話方しやがる。」

野田はハルバードを鶴野の首筋に向け言つた。

「関西弁も知らないのか。アホだあー。」

「浅はかなり……。」

「彼を仲間にしましょ。」

ゆりが言つた。

「ゆり－正氣かよ。」

思わず言つてしまつた。

ゆつは俺の方をむいて、

「彼の動きはなかなかだつたわ。素早い動きでわたしの懷に入つてきたときは驚いたわ。」

いや、それは抱きついたとしただけだとゆつ。

「とにかく鶴野君は今から戦線のメンバーよ。とりあえずは日向君あなたが面倒見てあげて。」

ゆつはそう言つと鶴野の縄を解いた。

「それじゃあ、今日は解散よ。」

ゆつはそうつと俺達に背を向け、歩いていく。

その後ろを鶴野がついていく。

「「つて待て待て待て。」「

思わず突つ込む俺と日向。日向は鶴野の襟首を掴むと引き摺つてつた。

椎名と野田は二つの間にか居なくなつていた。
残された俺と遊佐。

「・・・もうすぐお昼ですから食堂に行きましょう。」

遊佐の提案で昼食をすることになつた。

食堂の席に着く。

俺の昼飯はカレーライスだ。

一方の遊佐は肉うどんを食べている。

そしてなぜか遊佐の隣には鶴野がいた。たこ焼きを食べている。

「なんでお前がここにいる?」

俺が聞くと、鶴野は、

「ワイは男には興味がないんや。あんな青髪野郎と一緒に居てもおもろない。そんなわけで遊佐ちゃん、ワイと遊ばへんか?」

と言つ鶴野に対し、遊佐はなぜか俺の食べかけのカレーを食べながら、

「・・・あなたと遊ぶくらいなら、アオバさんと遊んでいた方がマシです。」

その言葉を聴いた瞬間、俺の顔は赤くなり、鶴野は固まっていた。

しばしの沈黙・・・。

「・・・アオバさん、いきましようか。」

遊佐が自分のうどんを食べ終わると言つた。

「ああ・・・。」

俺は席を立つ。いまだに鶴野は固まっている。微妙に涙目になつている。

俺はそんな鶴野を見て、

「なんかごめんな。」

そつ言つとその場を去つた。

それからじばりく、鶴野は固まつたままだつたらしく。

第5話「新入り」（後書き）

いかがだつたでしょうか?
次回もお楽しみに。

第6話「また新入り現れる」

夜。少し風があつて涼しい。そう思いながら俺と遊佐は廊下を歩いていた。

「おつ！…ゆりが新人を勧誘してるぞ。」

俺は校舎の2階からゆり達を見ていた。

男だった。死後の世界に来たばかりなのだろう。
状況が飲み込めていないようでゆりと言い争っている。

おつ！…ゆりが立ち上げつて必死に入隊させようとしている。
これなら勧誘も成功しそうだな。

「…・・日向さんがこちらに向かっています。」

遊佐が呟く。それはマズイ。日向は空気が読めないのに。

そんな不安をよそに日向はやつてきて、

「おおーい、ゆりつペ！新人勧誘の手はずはどうなつてんだ？人手
が足りねえ今だ、どんな汚い手を使つても……およ？」
やらかしやがつた。

新人は立ち上がり、グラウンドに向かい始めた。

「うああああつ！ 勧誘に失敗したあつ！…」
ゆりたちは騒いでいる。

「…・アオバさん、グラウンドに天使がいます。」
なにいいいい！…つて天使に話しかけてる…！

新人は天使と少し話すと片手を上げてその場から去ろうとしていた。いいぞ。そのまま何も起こらずにいてくれよ。

だがその願いもむなしく、新人は再び天使と話し始めた。雲に閉ざされていた月が彼らを照らし出す。

新人が激昂したかと思うと天使は呟いた。
すると天使の制服の袖口から幾何学模様が伸び、デジタル表示の数字が踊り、そして白刃が現れた。

間に合わねえか。俺はグラウンドへ行くため 階段へ向かう。
それと同時に新人は天使から心臓を一突きにされた。

「おいおい大丈夫かあ？」

俺は倒れている新人に駆け寄った。そこにはゆりと日向もいた。

「また日向君のせいで勧誘が失敗したじゃないのよ。
「すまねえ。」

ゆりは怒つており、日向は必死に謝つていた。

「とりあえず彼を保健室に。」

ゆりの指示に従い、俺と日向で新人を保健室へ運んだ。

いつの間にか朝になっていた。

俺はいま保健室にいる。少し寝てしまつたらしい。日向は先に校長

室へ行つてゐる。

校長室に向かつてゐると、前方から野田が歩いていた。なぜか殺氣を剥き出したにして。

「どうしたんだ？ そんなにイラついて。」

「俺が聞くと、

「ゆりつべの入隊を断つたやつを殺しに行く。」

堂々と言い放つとハルバード片手に保健室に向かつて行つた。

あの新入りかわいそびた・・・。死んだな。まあ死ねないんだけど。

校長室に戻り、TK、藤巻、松下五段と麻雀をして時間を潰す。

「國士無双だとおーー！」

藤巻が驚きの声を上げる。

「Wow! be surprised! —

TKは頭を抑えて嘆いてゐる。

「これほどの強さならひを子に勝てるかもしけんなあ。」

松下五段が言つた。ひを子ってガルデモの？ そついえは遊佐も麻雀には氣をつけろつて言つてたな。

「ひを子つてそんなに麻雀強いのか？」

俺が藤巻たちに質問すると、

「強いなんてもんじやねえよ。あれは毎回、ひを子の一人うちだぜ。」

「

そんなに言われると一度一緒にやつてみたい。

そう思つていると突然大きな音がして、窓ガラスの割れる音が後から聞こえてきた。

どうやら罠が発動したらしい。校長室の窓からゆり、日向、高松、大山などが外を見ている。

罠にかかったのは新人のやつらしい。

日向が助けに行つた。

新人を校長室に連れてきて、2時間後、ゆりが戦線の名前を変えようと言つ出した。

皆が思い思いに発言する。俺は戦線の名前なんてどうでもいいが。

そつ思いながら売店で買った、keyポテチを食べる。

「ねえ……、その人、もう起きてるんじゃない？」

大山の声に全員の視線が新人に集まる。

「え？ ああ、気がついた？」

「そうだ、コイツにも考えさせてあつたのよ。」

ゆりがソファに寝かされている新人の顔を覗き込む。

「時間はたつぱりあつたわ。聞かせて頂きましょつか」

「何を」

明らかに怪訝な顔をする新人。そりやそりだと思つ。

「『死んでたまるか戦線』に変わる新しい部隊名よ」

「『勝手にやつてろ戦線』」

「ほお、ゆりつに刃向かうたあい一度胸じゃねえか」

藤巻が新人に突っかかる。うわあなんだか一瞬即発の雰囲気。

「何なんだよお前らは……俺を巻き込むなよ……俺はとつとと消え
るんだ……」

その言葉に高松が反応し、ミジンコがどうとか言つて、
そのまま戦線メンバーに置み掛けられる新入り。

「まあまあみんな、そんな追い出すような真似はしないであげなさい。
この我が……、あー……、今何だっけ？」

ゆりが新人を庇つて、流石はリーダーだ。

「フジツボ戦線。」

藤巻がそう言つと、ゆりの飛び蹴りがモロに藤巻に入る。

「元に戻す！　『死んだ世界戦線』！」

その後も新人と戦線メンバーの話し合いが続き、突然、ドアが乱暴に蹴り開けられた。

「はやまるな、ゆりつ『ドゴガツ！　ガシャーン……』」

野田が罠に引っかかり、鳥になつた。

「アホだ……、自分の仕掛けた罠に嵌つてやがる…………」

「……」に無事に入るには、合意言葉場が必要なのよ。対天使用の作戦本部というワケ。——こ以外に安全に話し合える場所など無いわ。」

ゆりが新人に説明する。

「それで、どうするの？」

「少し時間をくれないか？」

「ここ以外でならどうぞ」

さうがゆに 新人の道跡をとんとん歎いていく
しばしの沈黙の後、

「オーケーだ！！」

「合言葉は？」

『神も仮も、天使も無し』私はゆり。この戦線のリーダーよ』

新人とゆりが握手を交わす。

ゆりが戦線メンバーを紹介していく。

「あそこにいるのがこないだ入ったばかりのアオバ君。」

「」にいるメンバー以外にも、まだ何十人と校内に潜伏している
わ

やうでやつが、ふと懸こぼつたよつて叫つた。

「そういえば貴方、名前は？」

「ああ、えと…………、」

「お、おと……、おとな、し……、音舞、……、」

「トの前は?」

「…………思に出せねえ……」

記憶がないパターンか。俺と同じじゃねえか。

ゆりが音無にURURUの制服を渡していた。
また新しいやつが増えたな、やつ思つた。

第6話「また新入り現れる」（後書き）

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第7話「特訓」

音無が入隊した日の晩、いつものように遊佐と晩食を食べること

「……晩から空いていますか？」

遊佐にそう聞かれる。

「ああ、何も予定は入っていないが。」

「そうですか。なら私と一緒に来てください。」

「別にいいけど。」

俺はそう言い、晩食のラーメンを啜った。

「……アオバさん、今から特訓開始です。」

遊佐にそう言われる。うん、特訓ね。分かるよ。これから戦闘があつたら戦わないといけないし、強くなることに越したことはない。でもさ……

「何で相手がこの女好きなんだよ……！」

俺の目の前にはなぜか鶴野がいた。しかもなぜか鶴野は妙にやる気満々だ。さつきから準備体操を行っている。

「……ゆうつペさんの命令ですので仕方ありません。ゆうつペさんの懷に入るほどの身体能力ならアオバさんの特訓相手には良いと思います。」

遊佐が説明していく。

「・・・それともアオバさんは私が鶴野さんと学園祭を一緒に回り回すこと良いと言つのですか？」

「へ？学園祭？鶴野と回るってことだ。

俺が混乱していると、遊佐の通信機に連絡が入る。遊佐が通信機を俺に渡してきた。俺が通信に出て、

『アオバ君？聞こえる？』

「ゆりか、ゆりの特訓のせいで俺は混乱しているのだが。」

『学園祭のこと？もつすぐ』の学校で学園祭があるのよ。この世界にも普通の学校行事はあるって言つわけ。もちろん普通に参加すれば消えるかもしれないけど。』

ゆりが説明してくるが、俺が聞きたいのはそこではない。

「遊佐が鶴野と学園祭と一緒に回るってことだよ。」

『ああそれ。そのままの意味よ。あなたが鶴野君に勝てなかつたら遊佐は鶴野君と回る。もちろん特訓をしなかつた場合はアオバ君の不戦敗ということよ。』

『ただしあなたが勝てば、遊佐は鶴野君と回らず、アオバ君と回るわ。良かつたじやない。学園祭を寂しく廻らなくなくてすんで。それじゃあね。』

「おー、待てよ。ゆり。そんなの勝手すぎる……。」

『順応性を高めなさい。そしてあるがままを受け止めるのよ。』

「分かつたよ。」

『それなら良い・・・。』

「だだし、変更して欲しいことがある。もし俺が勝つたら遊佐が誰と行きたいか選ばしてやつてくれ。」

「分かつたわ。」

そう言つとゆりは通信を切つてきた。

この勝負、負けるわけにはいかねえじゃねえか。

俺の戦闘魂に火がついた。

「・・・先に相手に参つたと言わせるか気絶させれば勝ちです。では始めてください。」

遊佐が言つた。

俺はショットガンを構える。対する鶴野の手にはハリセンが握られていた。

つてハリセン? それも紙でできつている。

「鶴野、俺を馬鹿にしてるのか?」

「ワイだってこんなもんは使いたくない。けどなあゆりつべが・・・

「

（回想）

「鶴野君そついえばまだ武器を渡してなかつたわねえ。はいこれ。」

そうじつて鶴野にハリセンを渡す。

「あの……」れは・・・。

「いま武器が不足してゐるから我慢して頂だい。壊れたらじつでも言つてね。すぐに作つてあげるから。」

「うわあ・・・。
かわいじつこ。

「そんな田でワイヤを見るんやない。お前なんてこのハリセンで十分や。」

そつこつて一氣に聞合を詰めてくる鶴野。

「……」

「これで終いや。なんでやねえん……」

鶴野の放つたハリセンによる一撃が俺の腰を直撃した。

全然痛くないが。そりやそうだ。紙のハリセンなんだから。俺は聞合を取り・ショットガンで狙いを定める。

「そんなもん弾き返したる。」

「バン・・・

乾いた銃声。

ハリセンで弾いつとするが、

גַּעֲמָה

ハリセンを貫通し心臓を撃たれる鶴野。
まあ紙だしね。

・・・そんな・・・ワイの・・・パラ・・・ダイスが・・・。

そしに死し、愛する雀野

「・・・・勝者、アオバさんです。」
遊佐がそう告げる。

「俺が勝ったから遊佐、お前は学園祭の口せ自由にしていて良いんだ。誰といっても良いし、一人で過ごしたいなら過ごしても良い。」
俺はそう言って、片手を挙げて「じゃあな」と言いつの場を離れようとするが、

「…待つて下さい。」

そう言われ遊佐に制服の裾を掴まれる。

「・・・私と一緒に行くのは嫌ですか。」

「嫌という分けではないけど。」

「……学園祭は私と回ってください。」

まさかの展開

「空」てるから別にいいけど。

そういうと遊佐は裾を掴むのをやめて、

「・・・ありがとうございます。」

そう言つた。そして校舎に入つていく遊佐。

残された俺は今のは『デートの誘いだつのかどうか。頭を悩ませて

いた。

第7話「特訓」（後書き）

いかがだったでしょうか。

次回はオペレーション・トルネードです。

次回もお楽しみに。

第8話「オペレーション・トルネード」

俺達は校長室に集まっている。

先ほどゆりが音無に銃を渡していた。

ゆつは白いベレー帽を被つて、

「あなたには馴れてもらつたために、こつもやつてこる簡単な作戦に参加してもらつわ。」

そひでゆつは一寸葉を切り、厳かに続けた。

「作戦名、『オペレーション・トルネード』。」

「ええつー?」

「むつ、こつは『カイ』のが来たな……」

場がどよめいた。簡単なのに『カイ?』訳がわからん。

「生徒から食券を巻き上げる!」

拳を握り締めながらゆりが言つた。

「その『巻き上げる』かよ!..」

音無が突つ込む。俺もそつ思つよ。

「しかも『力くねえよ!..』イジメかよ!..失望したぜ、武器や頭数だけ揃えやがつてよ!..」

そんな音無に危機が迫る。

「貴様、それはゆりっぺに対する侮辱発言だ！－！撤回してもらおうか。」

「ワイも同感や。」

野田のハルバードが音無に向けられ、さらに鶴野のハリセンが音無の頭を狙っている。

つて鶴野いたの？

「なんでだよ！－！」

音無が反抗する。

すると、松下五段が言った

「我ら『フジツボ絶滅保護戦線』は、数や力で一般生徒を齎かすような真似など決してしない。」

「あれ絶滅するの！－？」

大山が驚きの声をあげる。

「いつかはするだろ。」

「でも巻き上げるって言つただろ！が－！」

音無が話を戻す。

「ええ、文字通り『巻き上げる』わ。いい？あなたは天使の侵攻を阻止するバリケード班。」

「作戦ポイントである食堂を取り囲むように、それぞれ指定のポジションで武装待機。」

スクリーンに、大食堂の立体図と各人員の配置が映し出された。

俺は椎名と一緒に学生寮側で武装待機か。

「細かい位置は、後で高松君と大山君に確認して。」

「岩沢さん。」

ゆりが、岩沢に声をかけた。

「今日も期待してるわ。」

「ああ。」

岩沢がどうやって陽動するのか楽しみだ。

「天使が現れたら各自発砲、それが増援要請の合図になるわ。どこかで銃声が聞こえたら、あなたも駆けつけるよつこ。」

「作戦開始時刻は、一八三。」

現在時刻は、十七時三十分過ぎ。

ゆりの号令が下る。

「オペレーションスタート！」

時刻は18時25分。俺と椎名は学生寮側にいる。

「なあ、椎名。」

俺は隣にいる椎名に声をかけるが返事はない。

「天使がきたらどうすりやいいんだ?」

「・・・足を狙うと良い。」

椎名がしゃべった!!いやたいして驚くことじやないとと思うんだよ。ただいつもは「浅はかなり・・・」としか言わないから驚いただけだ。

ふと音楽が俺の耳に入ってきた。この聞聞いた曲だ。ガルデモだつたか。

これが岩沢たちのいった陽動とやらなのか。これで天使は本当に来るのか?

そう思つていると突然銃声が聞こえた。

橋のほうからだ。あそこを守つてるのは確か音無だつたよ。椎名はいつの間にか居なくなつていた。はやつ!!つて俺も行かなきや俺は急いで向かつた。

「大丈夫か?」

俺が行くと戦線メンバーは天使と戦闘中だつた。俺もショットガンを取り出し戦闘に加わる。

確か足を狙うんだつたな。狙いを定めて、

バン・・・

俺の放つた弾は天使目掛けて進みそして・・・

「がはつ・・・。」

なぜか横から割り込んできた鶴野が自分から当たりに行つた。
「女の子に・・・手出しが・・・させん。」

「アホだ・・・。」

「なにやつてんだよ！！」

「浅はかなり・・・。」

そのまま倒れる鶴野。そんな鶴野を見ようともしない天使。

その後も銃撃戦が続く。

それでも天使は近づいてくる。

松下五段はバズーカ砲を持ち、椎名はクナイを投げる。
三本の内一本が弾かれたが、一本が天使の肩に突きたつた。

その隙に松下五段がバズーカの引き金を引く。
ドカーン！とんでもない爆音と土煙。

徐々に薄れていく土煙の中から、天使が姿を現した。

「くそつ！！」

再び銃撃の雨。俺も何発か撃つ。

「まだかよ巻き上げは！？」
日向が苛立たしげに吐き捨てる。

その時だった。食堂上部の窓が全て開け放たれ、そこから何かが多数吹き出してきたのだ。

照明を反射してキラキラと輝くそれを手に取る。

俺の手には2枚の食券・オムライスと麻婆豆腐とかかれている。

戦線メンバーも食券を取り引換えしていく。

戦いは終わったようだ。俺も引換えしていった。

大食堂

俺は遊佐の右隣に座り、オムライスを食べている。

遊佐の左には岩沢が、俺の正面には関根が、関根の両隣にはひさ子と入江が座っていた。

「凄くよかつたよ。」

俺はガルデモのメンバーに言った。

「ありがとう。」

岩沢が返してくる。

すると関根が、

「今度の学園祭でもゲリラライブがあると細川からそんな時はむづくり見てつてよ。」

「ああ。」

俺はそづり言つてオムライスを口に含んだ。

第8話「オペレーション・トルネード」（後書き）

いかがでしたか？

やつとアニメの一話が終わりました。

これからはオリジナルの話も入れしていくので楽しみにしてください。

第9話「ギルド」

「武器が不足しているわ。」

ゆりにそう言われ、ギルドに行くことになつた俺たち戦線メンバーは体育館にいた。

「・・・見送りにきました。ギルドの最深部までは遠いですががんばってください。」

遊佐が言った。

俺は「ああ。」といいギルドに入つていた。

そして時間は過ぎて、生き残つてているのは俺とゆりと音無と椎名の4人のみ。

天使が来たため対天使用トラップが作動。

その結果、

ハンマーにぶつ飛ばされた野田。

鉄球に潰された高松。

レーザーに切り刻まれた松下五段。

やばつ、ゲロい。思いだすもんじやない。

落ちてきた天井に潰されたTK。

床が抜け、落ちていった大山と田向（落とされた）。

溺死した藤巻。

散々な結果だつた。それに今だに天使に出くわしていない。

「ちょっと止まって。」

ゆりが言つ。

「どうした？」

俺が聞くと、

「天使よ。」

ゆりが指を指す。そこには天使が、ギルドの地下を目指し進んでいる姿が。

「どうする？」

音無が聞く。するとゆりはしばらく考えて、

「誰か一人が困になるのが得策ね。」

全員の間に沈黙が訪れる。

「・・・なら、俺が行くよ。」

俺はそう言い、ショットガンに弾を込める。

「そう、ならこれを。」

ゆりは自分のナイフを渡す。

「これは普通のナイフより強度があるからこの壁にもバッヂリ刺さるわ。それじゃあ健闘を祈る。」

ゆりは手榴弾を投げ爆発を起こす。その土煙に紛れてゆりたちは先へ進んでいった。

残された俺は天使と向かいあう。天使と1対1は初めてだな。

俺はショットガンを天使の脚目掛けで撃つ。
見事に足に当たり膝をつく天使。だが・・・

「ガーデスキル，distortion。」
天使の傷がみるみるふさがっていく。

そんなのありかよ！俺は数発撃つが全弾弾かれる。

「hands on it。」

天使が白刃を右手に出現させる。

俺は自分のナイフを取り出し突っ込む。
それを天使が紙一重で避ける。

2・3度ナイフと白刃やぶつかる。その度に火花と数字が舞つた。
俺は蹴りを天使の右手に食らわせ少し隙が出来たところをナイフで刺しにいくが、

「ガーデスキル，delay。」

完全に直撃だつた筈なのに天使の姿が無かつた。

一瞬で俺の背後に回り込んだ天使が白刃を振るう。ナイフが弾かれ

る。

俺は左手でゆりからもらったナイフを握つたところで、

グサツ・・・

俺の左胸に天使の白刃が突き刺さる。激痛が走る。

だが俺は、

「やつと・・・捕まえた・・・。」

左手のナイフを握る力をいつそつ強めて天使の首に刺した。

その瞬間、俺の意識が薄れしていく。

それは天使も同じようで2人一緒に地面に倒れた。

『馬鹿共、お目覚め? ギルドを破棄、天使ごと爆破したわ。総員につぐ、至急オールドギルドへ。武器の補充はそこで急ピッチで行われてる。天使が復活する前に、総員、オールドギルドへ。繰り返す。急げ、馬鹿共。』

スピーカーから響くゆりの声で目を覚ます。

俺は自分の左胸に手をあて傷が治つていいのを確認してほつとする。

よしじやあ行くか。オールドギルドへ。
つてオールドギルドつてどー?

俺はこの後数時間、ギルドをさまようのであった。

第9話「ギルド」（後書き）

いかがだったでしょうか？

少し短かつたかな。

次回はオリジナルストーリーの学園祭です。

次回もお楽しみに。

第10話「学園祭前日」

「明日は、学園祭ね。」「ゆりは窓から運動場で学園祭の準備をしている一般生徒達を見ながら行つた。

「ゆりつべ、参加するのか?」「日向が言つた。

「ええ、参加するわ。ただし乱入と言つ形でね。」「

「乱入?」

俺は思わず言つてしまつた。良い印象はこれっぽちもないが。

「そうよ。学園祭は生徒により出し物や出店をだせるの。それはあらかじめ生徒会に報告しておかないといけない。なぜなら売り上げで順番を出すためよ。」

ゆりは「ちりを振り返つて、

「私達は学園祭当日に乱入し、天使の出し物や出店を妨害さらに緊急で出し物や出店を行つ。天使の売り上げを最下位に突き落とし、我々の売り上げを一番にするのよ。」

「それに何の意味がある?」「俺は聞いた。

「私達の田じるのストレス発散の場を設ける、ただそれだけよ。」「ゆりはそう言つた。嘘だな。他にも何か企んでやがる。」

「それじゃあ、各自チームを組んでどんな出店や出し物についてやるか考えておいて。あと一番売り上げの少なかつたチームには死よりも恐ろしい罰ゲームね。」

その言葉に意外とみんなのリアクションはなかつた。

「俺は誰と組もうか。」
自販機の前で *key* 「一ヒーを買いながら言った。

「ワイと組まへんか？」

いつの間にか隣にいた鶴野に声を掛けられた。
「つてお前かよ。お前のことだから女と組むと思つたぜ。」

「ワイだって男なんかより女と組みたかったわ。だけどなあガルデモと遊佐ちゃんは組んでるし、ゆりつペは別の作戦があるとかで黙田だし、椎名ちゃんはどこにあるか分からん。」
鶴野がぶつぶつと言つた。

「とつあえず、もつ一人探そつか？」

「異議なしや。」

と詰つわけでもう一人を探すことになった。

「まずは松下五段を仲間に加えよう。」

「俺の提案で松下五段を誘いに食堂に行つた。

そこには松下五段が肉うどんを食べる姿が。

その席の周りは高松や藤巻などの姿が。

「先を越されたか。」

俺たちは松下五段をあきらめる」とした。

校舎の周りをぶらついていると、ストリートライブをしている少女がいた。

ハ重歯が特徴的な子である。その少女は可愛らしい外見とは裏腹に手錠や悪魔の尻尾のようなパンクなアクセサリーを身に着けている。

なかなかの腕前のようなだ。曲はガルデモのようだ。

演奏が終わる。

パチパチパチ

その少女がこちらを振り向く。

「凄く上手かった。」

そう言つとその少女は少し照れて、

「ありがとう。」

そういった。

今気づいたのだがこの子も戦線のメンバーの格好をしている。

「なあ君・・・。」

「君じゃないよ。コイって名前があるんだよ。」

「コイはセツヒ言ひて、ギターをベンチの上に乗せる。」

「俺の名前は小田桐アオバだ。よろしくなコイ。」

「ワイは鶴野鉄平や。」

「よろしくお願ひします。先輩。」

ペコリと頭を下げる。

「コイは誰かと学園祭の出し物を何にするか決めてるのか？」

俺が質問すると、コイは首を振り、

「まだ決まってないよ。」

と言つた。

「なら俺たちと組まないか。お前の力が必要なんだ。」

「別にいいけど。」

いつして俺と鶴野とコイは一緒にチームを組むことになつた。

第一〇話「学園祭前日」（後書き）

いかがでしたか？
次回は学園祭当日です。
次回もお楽しみに。

第1-1話「学園祭当番？」

学園祭当番・・・

「ついに始まつたわね。」

ゆりが校長室の窓から運動場を見下ろして言つ。

「みんなはちやんといひへるかしり。」

（運動場）

たくさんの出店が並ぶ中、一際客が集まつてゐる店があつた。

高松・松下五段・野田の3人による焼きそば店だ。

何故人がそこまで集まつてゐるかといつと・・・

スパスパスパ・・・

野田が見事なハルバード捌きで空中に投げた野菜を切り刻んでいるのだ。それを松下五段が調理（3割摘み食い）している。高松は呼び込みを行つていた。

そのころ俺たちは、特設ライブ会場にいた。

「いいか、ガルデモの後からユイが演奏しても多分人は集まらねえ。」

だから甲こうかにがちねる。

もちろん俺たちは生徒会には参加することを伝えてないので、ゲリラライブという形になる。

「ユイ、頼んだぞ。」

俺は本来次に演奏する予定の生徒達が準備しているうちに behaving にユイに促す。

ヨイが緊張した足取りでステージへ上がる。鶴野がスポットライトをヨイに当てる。

御客力われめく

ユイが軽く自己紹介して歌いだす。

曲は確か
M
y
S
c
u
l
Y
c
u
n
由
e
a
t
s
!
た

思ったよりも観客が集まってきた。好評なのかもしれない。
そして歌い終わりマイクパフォーマンスへ移る。

「イヒーイー！ 皆、今日は来てくれてありがとうーーー。」

回転しながら勢い良くマイケスタンプを蹴り上げると、ケーブルが足に引っかかり、

「...」

から降りた。後ろの壁に顔面からぶつかった。俺は急いでユイを回収しステージ

一方、校舎内では、

『音無君・白向君・大山君・藤巻君準備はいいわね。』
無線から伝わるゆりの声。

「いっちは準備万端だぜ・ゆりっペ。」

『あと5分後に行動開始よ。なるべく時間を稼ぎなさい。なんなら他の戦線メンバーを巻き込んでもいいから。』

体育館では、

「じゃあ始めようか。」

岩沢の声と共にガルデモメンバーが所定の位置に着く。
そしてメインのゲリラライブが始まった。

「ガルデモだ……。」うしちゃいられない。』

コイはそう言うと体育館へ走っていった。

俺も遊佐との約束を守るために体育館へ向かつた。

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第1-2話「学園祭♪？」

「遊佐、待つた？」

観客席の後ろに立っていた遊佐に声を掛けた。

「・・・少しだけ。」

遊佐が少し俯き言つた。

「いめん。これで許して。」

俺はそう言つて、さつき買つてきたわたがしを渡す。

「もしかして甘いもの嫌いだった？」

「いえ、むしろ好きなまつです。ありがとうございます。」
遊佐はわたあめを受け取り千切つて食べる。

「・・・甘くて美味しいです。」

そう言つと遊佐はもう一度わたあめを千切り、俺の口元に寄せてくる。

「くつ？」

「あ~んしてください。」

これは世の男性なら喜ぶであろう展開。

だが俺は素直に喜べない。いつもの遊佐らしくない。

これはドッキリか。ドッキリなのか。ドッキリ成功の札はどうある?

周りを見渡すが怪しいところはない。

「あ～んです。アオバさん。」
もつと近づけてくる遊佐。

「あ～あ～ん・・・。」

口を開け、わたあめを食べさせてもらひ。甘い。

「おいしいですか？」

「うまい。」

「・・・良かつたです。」

遊佐はそう言いライブを見始める。

俺もガルデモのライブを見ることにした。いつもなら天使が止めに来るのだが今回はどういうわけか来ていなかつた。

時は少しさかのぼり、ガルデモのライブが始まったころ、

『なるべく天使を体育館に近づけないでね。作戦開始よ。』
通信機からのゆりの声を合図に、大山、藤巻が動き出す。彼らの向かう先は3年の教室。

ガルデモのライブを見に行こうと体育館を目指す生徒達とは逆方向に向かっていく。

そして教室から天使が出てきた。

「きたぜ。」

藤巻が天使を見つけ長ドス片手に天使の前に立ちふさがる。

「俺の眼鏡をしらねえか？無くしちまつたんだ。」

藤巻が天使に頼み込む。もちろん藤巻は眼鏡なんてもつっていない。

「それは大変ね。私も探すわ。」

天使はそんなことに気づかず探し始める。

（作戦成功だな。）

「あつたわ。」

そう言つて藤巻に眼鏡を渡していく。藤巻は以外だという顔をしている。

後で分かつたらしいのだがその眼鏡は高松の無くしたスペアだったらしい。

藤巻の作戦が失敗し、再び体育館に向かう天使。

そこに現れる大山。

「あのぉ・・・僕と一緒に学園祭をまわりませんか？」

大山が勇気を振り絞りナンパするが、

「今忙しいので・・・」

あっけなく振られる。その言葉を聴いた瞬間固まる大山。

「振られたな。」

隠れてこつそり見ていた日向が言つ。

天使は大山の横を通りて体育館へ再び歩き出そうとするが、
「校長室まで案内してくれよ。」

「いいわ・・・ついてきて。」

天使と共に日向が校長室へ向かう。後ろにいた音無に田代で合図を送
る。

「日向・・・お前まさか。」

そして数分後天使と日向が、ハンマーにぶつかり、窓を突き破り運
動場に落下した。

そのころゆりは、職員室に忍び込んでいた。

「誰もいないわね。」

ゆりは奥の席に行き、そこにあつた紙袋の中身を確認すると、それ
を持ち出して職員室を後にした。

結局天使はライブに来ることは無かつた。

その後、遊佐と一通り学園祭を回つて、途中から関根と入江も加わ
つて回つた。

後日談だがこの作戦の目的は先生に没収されたものを奪還するため
だつたらしい。

あと大山がなぜかうつ状態になつていた。

第1-2話「学園祭当日？」（後書き）

いかがでしたか？

次は天使エリア侵入作戦（アニメなら第3話）を書く予定です。

次回もお楽しみに。

第1-3話「竹山君登場!」

校長室に集まつた戦線メンバー。相変わらず椎名の姿はない。

今日はガルデモの新曲発表だ。

いつもの激しいロックとは違い、今回は優しい感じのバラードだ。

だが戦線メンバーの反応はいまいちだった。

「…なぜ新曲がバラード?」

ゆりはどこか不満そうな顔をして言った。

「いけない?」

「陽動にはね。」

確かに陽動には向いていないかも知れない。あまり派手ではないようだし。

「陽動って何なんだ?」

音無が聞いた。

「彼女達は校内でロックバンドを組んでいて、生徒からの人気を勝ち得ているの。私たちは直接危害を加えたりはしないけど、時には利用したり妨げになる時は排除しなければならない。そう言つ時に彼女達に陽動してもらつのよ」

ゆりが説明する。確かに学園祭でのあの時の集まりよりは凄いとか言いようが無かった。

その後、バラードは陽動に向いていないことから没と云うことになつた。

それからゆりはカーテンを閉めてと大山と高松に声を掛ける。

彼らがカーテンを閉めると、今日のオペレーション会議が始まった。

「今回の作戦は天使エリア侵入のリベンジを行う。決行は三日後。

「またですか・・・しかし前回は・・・」

高松が言いかけたところで、

「今日は彼が作戦に同行するわ。」

ゆりがそう言つと、椅子の後ろから一人の少年が現れる。

「よろしく。」

その少年が挨拶するが、

「椅子の後ろから!？」

「眼鏡かぶり。」

「はつ、ゆりっぺ。何の冗談だ?」

「そんな青瓢箪が使い物に何のかよ?」

次々に飛び出す悪口の数々。

そんな悪口を浴びながらも顔色一つ変えない少年。

「まあまあ、そう言わないでくれる?」
ゆりが皆をなだめようとするが、

「はつ、なら試してやる!」

野田はハルバートを眼鏡少年の顔に近づけた。

「お前友達いないだろ。」
音無しが突つ込みを入れる。

「3.1415926535897」

「うわあー！やめろおー、止めてくれー！」

突然の野田の叫び。

「まさか！！円周率だとおー！？」

「眼鏡かぶり。」

「止めてあげてー！その人はアホなんだー！」

「うわあーー！止めるおおおーー！」

「25342117067982148086513282306
6470938446095」

何だこの光景は。アホだ。

ゆりがそれを見てよつやく声を発する。

「これが私たちの弱点・・・そつ・アホなこと。」

「リーダーが言つなよ。」

思わず突っ込んでしまった。

「前回の侵入作戦では、我々の頭の至らなさを露呈してしまった。しかし、今回は天才ハッカーの名を欲しいままにしている彼、バンドルネーム“竹山君”を作戦チームに登用し、侵入エリアを綿密に捜査する。」

「…それは本名なのでは？」

高松が言つた。

「クライストとお呼び・・・。」

「かつこいいハンドルが台無しだな。」

「さすがゆりつべ。」

「これって天然の部類に入るのか？」

「Don't crazy」

他の戦線メンバーも話し始める。

「一度田といつともあり、天使も今まで以上に警戒して来るわ。いつちよガルデモには派手にやつてもらわないとね。」
ゆりが岩沢を見て言つた。

「りょーかい。」

「あと、アオバ君と鶴野君はガルデモの警備をお願いね。」
ゆりに頼まれる。

「分かつた。」

「ゆりつべの言つことならワイ従うでえ。」

「それじゃあ、今日はこれで解散ね。以上。」
じつして今日のオペレーション会議は終わった。

鶴野と共に廊下を歩いていると、前には入江がいた。
なにやら重そうに段ボール箱を運んでいた。手伝おつ。そう思い近
づく、

「入江、大丈夫か？ それ持とうか？」

「あ、アオバ君。ありがとう。はい、よろしくね。」

俺は入江から段ボール箱を受け取る。女の子が持つにしては少し重たいぐらいだつた。

「ワイは入江ちゃんを持つでー。」

鶴野がそう言つて入江に近づく。最近鶴野は人としての道を踏み外しているような気がする。

「きやつー！」

入江は自分に迫つてゐる危機に気づき俺に抱きついてくる。

いや、これはまずいのではないか。バランスが崩れるとか、そんなことはどうでもいい。

ただ胸が・・・胸が当たつてます。

そんなこと知る好もなく入江はさうに密着してくる。

「ワイが・・・。」

「みゆきちに何してんのよー！」

鶴野が金髪少女もとい関根からドロップキックを受け吹き飛ばされていた。

それでもなお起き上がつてくる鶴野。

「アオバ、お前ばかり女にモテやがつて、遊佐ちゃんに言つけてやるでえー。」

「・・・私ならこーにぃますが。」

遊佐がいつの間にか俺の後ろにいた。

鶴野が俺を指差して、

「コイツは遊佐ちゃんというものがありながら浮氣しとつたでえー。」

「

だがその言葉を聴いても顔色一つ変えることなく、
「別にかまいませんよ。私はアオバさんを信じますから。それに・
・」

そう言つた。なんて良い子なんだ。

「・・・体だけの関係で私は満足ですか?」
その場が一気に凍りつく。なんて事を言い出すんだ。

「そ、そんなに深い関係だつたんだ・・・。
入江が呟く。ゆっくり俺から離れる入江。いや、離れていかないで。
これは違う、違うんだ・・・。

この誤解を解くのに丸一日かかってしまった。

第1-3話「竹山君登場ー」（後書き）

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第14話「My Son」

天使エリア侵入作戦・・・天使の情報を探るためクライストもとい竹山が戦力に入ることにより作戦成功率が確実に上がっていた。

だが、確実に成功させるためには天使を引き付ける必要があった。そこで今回はいつものゲリラライブとは違うのだと呟つ。

「今日は告知ライブという形だ。」

岩沢が陽動班のメンバーに伝える。しかも体育館を占拠して行うらしい。

「だから、天使はともかく先生達も黙つていなければならない」ひさ子が岩沢に続く形で言った。

その後、陽動班のメンバーの配置を伝える岩沢。

「小田桐、鶴野は体育館入り口で待機。」

「了解。」

それから解散ということになった。すると遊佐が手招きをしてきた。

「どうした？」

「・・・これを。」

遊佐は俺に通信機を渡してくれる。

「連絡が取れる用にです。」

遊佐はそう言つて体育館を後にした。

そして、作戦決行の時間。

体育館に来ていた生徒の数はそれほど多くなかつた。

だがガルデモが演奏すればもっと生徒が集まつてくるはずだらう。

体育館内の照明が落とされた。それと同時にライブが始まつた。

1曲目が終わるがあまり生徒の数は増えていない。
それどころか、体育館に教師が向かつてきていた。その後ろには天使もいた。

俺は遊佐に教師が来たことを伝える。

『先生には手を出さないで下さい。天使のみ警戒してください。』
遊佐からはそんな返事が来た。

教師が横を通り過ぎた後、天使を呼び止める。

「止めに来たのか？」

「・・・一応。だけどその必要は無いようね。彼女は決めたようだ

し。」

天使はそういうて中に入つていいく。その必要は無い。ビリビリ」とだ？

その後、教師によりガルデモのメンバーは取り押さえられた。

それを見て天使は体育館を後にする。

一般生徒が口々に文句を言つが体育会系の教師が怒鳴り散らし、黙らせる。

体育会系の教師は岩沢のギターを掴み、

「これは捨ててもいいよな？」

と岩沢に聞く。

岩沢は一言何かを言つと、教師がしかめつ面をした。

「・・・それに・・・それに触るなあ！！」

岩沢は叫び声を上げ、押さえ付けていた教師を振り払つて自分のギターを取りにいく。

それと同時にひさ子はステージ裏へ向かつた。追いかけてきた教師は、遊佐の横を通り過ぎると同時にこけていた。

そして岩沢は歌い始めた。スピーカで歌声が流れる。全校生徒がその曲に聴き入る。

それと同時に天使が戻ってきた。

「悪い。ここから先には通すわけにはいかねえんだ。」

「そや、帰つた帰つたやで。」

俺と鶴野で入り口を塞ぐ。

「・・・そこをどいて。」

天使が言つ。

「嫌だね・・・。」

「そう・・・。」

俺が断ると、天使の手には白刃が現れる。

腰からナイフを取り出す。そして白刃とナイフはぶつかった。

1・2分たつた時、突然天使は戦うことやめ、俺たちに背を向けていた。

その瞬間、歌が終わりステージからゴトッと音がした。

振り返ると、そこには岩沢の姿は無く彼女のギターだけが床に落ちていた。

「岩沢・・・？」

誰かの声がした。

だが一つだけわかることがある。

彼女は消えてしまったと言うことを。だが歌っていた彼女はとても幸せそうだった。

第14話「My Son」（後書き）

いかがでしたか？

次回は球技大会を予定しています。

次回もお楽しみに。

第15話「DAY GAME?」

空は雲ひとつ無い青空だ。

そんな日は外で運動するに限るのだが、俺たちは運動なんて行わず校長室に集まっていた。

「コイツが古沢の変わりだと？」

「ありえねえ。」

野田と藤巻が言った。

2人が見つめる先には、戦線の制服にパンクなアクセサリーを身に着けている少女がいた。

「コイつていいます！…みるしく述べ願いします！…」

その少女は元気良く挨拶し、戦線メンバーの反応を窺う。

そもそもコイがここにいるのは俺が連れてきたからだ。

岩沢がいなくなりボーカルがいなくて活動できないという事を入江たちに聞き、学園祭で調子が良かつたコイを紹介しようと思つたらだ。

だが戦線メンバーの反応はいまいちのようだ、

「いいですか？『Girls Dead Monster』はロックバンドですよ。」「アイドルユニットにでもするつもりか？」

そんな中、コイは、

「いや、ちゃんと歌えますから！…どうか、聞いてから判断して下

さい……」

そういうて歌いだす。学園祭の時の曲だった。

戦線メンバーは聴き入ってはいたが、マイクパフォーマンスに入ったとき事件が起きた。

「イヒーイー！ 皆、今日は来ててくれてありがとうーーー！」
勢い良くマイクスタンドを蹴り上げるが、

「ぐへつーーー！」

ユイの首にケーブルが絡まり、それは天井に突き刺さって彼女の身体を釣り上げた。学園祭の時もこんな感じのことがあった気がする。

それを見た戦線メンバーは、
「何かのパフォーマンスですか？」
「デスマタルだったのか。」
口々に言つ。

「し・・・死ぬ・・・。」

ユイが小さな声で言つた。

「いや、事故のようだぞ。」
音無が否定していく。

ユイをケーブルから外し、ゆりは、
「とんだおてんば娘ね。クールビューティだった岩沢さんとは正反対。」

ユイを見下ろしながら言つた。隣では高松が、

『『Girls Dead Monster』のボーカルにはいか

がなものかと。」

眼鏡を上げながら言った。

「別のものを探さないか?」

「そうすつか。」

「「カラアーーーちゃんと歌えてただろ。」それでも若沢さんの大ファンで全曲歌えるんだからなあ!!」
ユイが起き上がりながら反論する。

「心に訴えるものが無かつたんだよな。」

「ありませんね。」

「ねえな。」

だが田向と高松と藤巻に却下される。

「「カラアーーーそんな曖昧な感性で若い田を摘み取りにかかるな!!」

「それでもお前ら先輩か!!」

ユイが腕を振り回し、叫ぶ。

「「つねにやつだな。」

「すでに言動に難ありだな。」

「「やこ」を何とか頼む。」
ユイの隣に行き俺も頭を下げる。

「「どうする?」

「やる気だけはありそうな。アオバ君も言つてゐるが、しかし後はガルデモに任せましょ。」

ゆりが腕を組みながら言った。

「コイは目をキラキラ輝かせながら、」

「本当にですか！？やつたーーー！ギターのひさ子さんと組めるう。ひさ子さんのあの殺人的なリス捌き、たまんないっすよねえ。頭どうなってんすかねえ。」

「クビだな。」

「ほえー！？私何か悪いこと言いましたか！？」

「これじゃあ球技大会で大々的な作戦は行えないわね。」

「球技大会？そんなのがあるのか？」

音無がゆりに尋ねる。

「そりゃあるわよ。普通の学校なんだから。学園祭だつてあつたじやない。」

「大人しく見学か。」

日向が言う。だがゆりは不敵な笑みを浮かべ、

「もちろん、参加するわよ。」

「「参加してたら消えるんじやないか？」」

俺と音無が同時に聞いた。

「もちろんゲリラ参加よ。いいあなた達？それぞれメンバーを集めたチームを作りなさい。一般生徒にも劣る成績を納めたチームには・

・・死よりも恐ろしい罰ゲームよ。」

その言葉にメンバー全員が動搖していた。

この間借りていた通信機で遊佐に連絡を取る。球技大会について尋ねると、

『・・・種目は野球です。アオバさんもどこかのチームに入つてください。日向さんのあたりがお勧めかと。』

『それとゆりつペさんの罰ゲームには気をつけてください。精神崩壊する程のものらしいですから。』

「わかったよ。」

とりあえず遊佐のお勧めの日向のチームに会いに行こう。人数が揃つてなきやいいんだけど・・・。

「アオバ！！来てくれたのか。ありがとう。」
日向に言われる。メンバーは音無と2人だけらしい。
ひさ子や松下五段・TKにも断られたという。

「だがどうするんだ？高松や竹山もチームを作つてゐみたいだし、

あてはあるのか？」

俺が田向に聞く。そこに聞き覚えのある声がした。

「お困りのよひですなあ。フッフッフッ……」

「コイだつた。

「悶絶パフォーマンスの「テスメタルボーカルか。」

「なにおおお……そんなことあるキャラにみえるかあ……」

コイが田向の側に行き反論する。

「そんなことよリメンバー足りないんでしょ。あたし戦力になるよ。」

田向を小突きながらコイが言ひ。

田向はしじまひく考へると、

「当たり屋か。よし、採用……」

「お前の脳みそ、とろけて鼻から零れ落ちてんじやねえのか。」

田向の言つた言葉にコイは怒つて、キックを田向の首にモロに入れ

た。良い蹴りだな。

「お前……俺、先輩だかんな……。」

田向が首を押さえながら言ひ。

「おっとお。先輩のお脳みそ、おとろけになつてお鼻からお零れになつておいででは？」

そうじつて田向の頭にチョップするコイ。その行為にあわる田向。

「でも、運動神経はよむやうだな。」

「ああ、コイツはダークホースかも。」

俺と音無はコイが入ることに文句は無い。

「お前らなに言つてんだよ。こんな頭のネジの飛んだヤツの仲間だと思われたくないぜ。」

田向が否定するが、

「そんなこと言つても田をついたヤツ、断られまくつてゐるじゃないか。」

「人数が揃わないと参加すらできねえぞ。」

その言葉に反論できない。

「せうそう見てましたよ。なのでコイにやんが加勢しにやつてきました。」

「はあ？ もういつぺん言つてみる。」
田向がコイを睨みつけて言つた。

「コイにやん」

「そうこいつのが一番むかつくんだよ。」
「ギブギブギブ・・・。」

関節技をかけられるコイ。

「さつあと行くぞ。」

とりあえず4人目はコイに決まった。

第15話「DAY GAME?」（後編）

いかがでしたか?
次回もお楽しみに。

第16話「DAY GAME?」

体育館倉庫

「椎名つむ。どうだ? 出て来いよ。椎名つむ。」

「何ようだ。」

物陰に少し隠れている椎名。

「探してたぜ。お前運動神経いいじゃん。」
日向が笑顔で椎名に話しかける。

「はかつたことも無い。」

「絶対いけるって野球やろつぜ。」

日向の提案に椎名は、ギルド降下作戦の事を話し始めた。音無に負けたことが悔しいようだった。

「お前に遅れを取つているとしたら集中力。あの日以来私は、この竹箒を指先の一点で支え続けている。」

「アホですね。」

「アホだが戦力になるぜ。」

「あれって相当凄いんじゃね?」

兎にも角にも椎名は音無と対決することを目的として仲間に入った。

「 アイツを誘うつやつなんていねえ。直情的でゆうつペ以外の指示には従わない。 」

「 つまりあの人もアホなんですね。 」

俺たちの次のターゲットは、現在上半身裸でハルバードを振り回している野田だ。

「 だがアホは利用できる。それに長いものを振らせたら右に出るものはない。 」

日向が自信満々に言つ。

「 ふつ、ついにきたか。決着の時がな。 」

野田はハルバードの刃先を音無に向け言つた。

「 まあまずは小手調べだ。球技大会でお前とこいつのどちらの運動神経が良いか見せてもらおう。 」

日向が止めに入り言つ。

「 なぜ? 」

「 強いだけじゃあ、ゆりつペは振り向いてくれないぜ。 」

しばしの沈黙。

「 フツ、いいだろ。 」

手を握り合ひ日向と野田。

「アホだ。利用されていることに気付いていない。」
「もう、どうしようもないな。」

6人目は野田になった。

その後、他の戦線メンバーを当たるが別のチームに取られていた。そこで人数を調整するため、ユイのファンの3人の女の子達が入ることになった。

そして球技大会が始まった。

「おお―――！我らが戦線チームはどじも順調に勝ちあがつてますよ。」

ユイが試合結果を見て言った。

「んじゃ俺らもいっちょ行きますか。」

「またか・・・。」

「次に進めるのは俺たちのチームに勝った方と云ふことで、じゅんけんで決めてくんない。」

「どんどんチームが増えてきやがる。」

不満そうな顔をする相手さん。

「だつて俺たちも」の学校の生徒だぜ。なあお前らもお願こしれ。田向が俺とコイの背中を押す。

「本気でここや。」りあーーー！」

「おーおこそれはどうかと思つわ。」
コイの一言に思わず突っ込んでしまひ。

「なにドス効かせてんだよ。」

田向はコイに関節技を掛けた。

「間接が碎けます。ホームランが打てなくなります・・・。
「そんな期待最初からしてねえよ。」

「リード負けたら罰ゲーム決定だかんな。初戦は気合入れていかね
えと。一番お前なあ。」

田向はそう言つて音無を指差す。

「俺はー?」

音無を押して野田が前に出でてくる。

「まあ待て。2番が俺・椎名3番・そしてお前が4番だ。走者一掃
しねえとお前の負けだからな。」

「フツ・容易いことだ。」

俺は5番になつた。

「7点以上でホールドだ。天使が来る前」そつと手付けちまわつ
ぜ。いくぞ・ファイトおおうーーー！」

「お・・・おう・・・。」

「驚くべき団結力の無さだな。」

野田がアホなことをする以外は俺たちは順調に点数を取つていった。
俺も2打席2安打と絶好調だ。

相変わらず椎名は竹箒を指先の一点で支えながら野球をする姿は滑稽だつたが。

試合は終わり3回「ールド勝ちだつた。
試合も終わり一休みしていると、そこに天使が現れた。

第16話「DAY GAME?」（後編）

いかがでしたか?
次回もお楽しみに。

第17話「DAY GAME?」

校長室から双眼鏡を使い、グラウンドを見るゆり。

「炙り出しに成功ね。こつちは武器もなし。あるのはバットにグローブのみ。はたしてどんな平和的解決を求めるのかしら。見ものだわ。」

ゆりが見つめる先にいたのは、野球部員を引き連れた天使の姿だった。

向かい合う天使と日向チーム。

「あなた達のチームは参加登録をしていない。」

「別に良いだろ。参加することの意義がある。」
日向が反論する。

「生徒会副会長の直井です。我々は生徒会チームを結成しました。我々が正当な手段で排除していきます。」
ナルシストみたいな感じの少年が言った。

「野球部のレギュラーってわけ。勝てるわけねえじゃん・・・。」
日向が不安の声を漏らす。

「いいや、これで勝つたらかっこいいと思つぜ、なあコイ。」
俺がコイに言つと、コイは何を思ったか相手チームに、
「頭洗つて待つとけよな。」
威嚇をし始めた。

「お前は二三振だろうが、もっと洗うのは首だ。頭だつたら衛生上

の身だしなみだ。』

日向が突っ込みながらコイに関節技を掛ける。

「痛いです……。』

『アオバさん、竹山チームと高松チームも負けてしまいました。』

遊佐から連絡が入る。

『そうか……。』

生徒会チームは予想以上に強いらしい。

『……私も応援に行きます。なのでガンバです。』

『任しどけ。』

だがまだ負けると決まったわけじゃない。俺たちにはとっとおきの秘策があるのだから。

そして試合が始まった。

先ほどの順番とは少し違い、俺が1番、音無が5番に入れ替わった。

カキーン!!

打球音が響く。

ライト前ヒットだった。

その後に満塁で野田がホームランを打ったので一回表で4点が入る。

そして守備では、3点も取られてしまっていた。

『タイム。』

日向と俺が審判にそう言い音無のところへ行く。

「ヤベエな。さすがに野球部のレギュラー相手じゃ抑えきれねえ。

特にうちの外野はザルだから。」

チラリと外野を見る日向。だがその顔が驚きの表情へと変わる。

そこには肉うどんを食べている松下五段とたこ焼きを食べている鶴野の姿が。手にはグローブをはめている。

「食券があつたからおじつてやつたんだ。」

「俺もだ。」

「お前らかよ。よし、良くやつた。あいつは食い物の義理は忘れないこれで外野の守備もバツチリだぜ。」

そういうながらコイに関節技をかける日向。

「あいたたたたたたた、痛い痛いギブギブ……後で殺す。」

松下五段と鶴野の加勢により外野に来る球は全て2人に取られていった。

そして最終回、一点差、2アウト、ランナー2、3塁。これは勝てるかもしれない。

「ターミム。」

音無の声が響く。音無は日向のところに向かいつ。ビツチャッチャ一交代を言いに行くようだ。

だが日向の様子がおかしい。それは岩沢が消える前のようなそんな感じを思い出させるものだった。

「……消えるのか?」

後で聞いたのだが日向は生前に野球部で、甲子園を目指していく、最後の中央大会の最終回、今のような状況で、セカンドフライを落としてしまったらしい。それが心残りでこの世界に迷い込んだという。

しばらくして、音無がマウンドに戻つてくる。
その場にいる全員の視線が音無に集まる。

「決める……音無……」

日向が言う。

そして音無は投げた。

カキーン！！

打者が撃つた球は、なんの変哲も無いセカンドフライ。

だがそれが上がった直後、音無の様子が変わる。
「日向あ……」

日向が徐々にグローブを上げていく。

岩沢が消える前の雰囲気とかぶる。

「マズイ……」

直感で感じ取り日向へ駆け寄る。だが間に合ひそうに無い。

そして日向がキャッチしようとした時、
「おわっ……」

「隙アリ……」

突然日向が倒れる。

「よくも万地固めにしまくつてくれたな。このおー！」

そして倒したのは、まさかのユイだった。

そして相手チームが2人ホームベースに戻り、ゲームセット。俺たちの逆転負けになつた。

だが、これで良かつたのかかもしれない。

疲れた体を休めるため腰を下ろす。

相変わらずユイと日向は喧嘩している。

遊佐がやってきて、タオルが渡される。

タオルをもらい、顔の汗をふき取る。洗剤の良いにおいがする。

「『めん、勝てなかつたよ。』

「・・・別に良いです。アオバさんが野球をしている姿はかつこよかつたですから。」

遊佐がそう言つてくれたので少しだけ気持ちが楽になつた。

第17話「DAY GAME?」（後書き）

いかがでしたか？

次回はいよいよテストです。

アニメではとってもおもしろかったのでこの小説でも面白く仕上がるかどうか不安ですが・・・。

次回もお楽しみに。

第18話「赤点大作戦！」

（校長室）

「・・・ついにこの時期がやつてきたか・・・。」
ゆりが窓から外を眺めながら言つ。

「何だ？何が始まるんだ？」

音無が尋ねる。

「天使の猛攻が始まる。」

天使の猛攻？より活発的になるのか？どうして？

「・・・テストが近いから。」

はつ！？

「何故。」

音無も疑問に思つたのか尋ねる。

「考えればわかるでしょう？授業を受けさせることも大事ですが、
テストを受けさせていい点を取らせることがそれも大事です・・・天
使にとつては。」

高松が説明する。

「けどこのテスト期間、逆に天使を陥れる大きなチャンスとなりえ
るかもしない。」

ゆりは何か企んでやがる。あまり良い予感はしないが。

「何か思い付いたようだな、ゆりつべ、聞かせてもらひやせ。」

藤巻が聞く。

「天使の邪魔を徹底的に行い、赤点をとらせまくる。そして、校内順位最下位に突き落とす。」

その目的は生徒会長としての名誉の失墜。そうすることで教師や一般生徒の見る目が変わるという。

「「どんな?」変化なんだ?」

俺と松下五段が尋ねる。

「さあ?そこまでは読めないわ。」

いいや、ゆりは何か知っている。そもそも天使がNPCならばこんなことをしてもたいして効果がない。だとしたら考えられることは絞られてくる。天使が俺たちのようにここにやってきた死んだ人間であると言つことだ。

まあ全ては作戦が成功したら分かるだろう。

そしてこの作戦に参加するのは、音無、竹山、高松、白向、大山、そして俺。

選んだ理由は見た目が普通だかららしい。

テスト当日。

テストの席はその日の朝、くじ引きで決定された。

俺は天使の席の3つ後ろの席。大山の右隣の席もある。

竹山が天使の前の席を引き当てるに成功している。

今回の作戦は竹山が2枚解答用紙をもち、天使の解答用紙を摩り替えるというものだった。そのため俺らは派手な行動で天使を引き

付けなければならぬ。

そしてテストが始まり・・・

（勉強してなかつたのに意外と簡単だな。これなら余裕だ。）
そう思いながら問題を解いていき、チャイムが鳴る。

「なんじゃありやー!? グラウンドから超巨大なタケノコがによきによきとー!」

日向が行動を起こすが、生徒は全く興味を示さない。

（やらかしたな。）

そう思つたとき、ゆりが何かのスイッチを押した。その途端日向はいすごと浮上し、天井に後頭部がぶつかる。

二時限目。

「先生、実は私・・・着痩せするタイプなんです。」

高松が上半身裸になり、鍛え上げられた肉体を見せ付けるが、たいして注目を浴びない。

またしても日向のように天井に後頭部を叩き付けられた。

三時限目。

（くそ、ついに俺の番かよ・・・。）

そしてチャイムが鳴り、

(さあ いけえ！！)

このときのため俺の机の中に時限タイマーを仕込ませて置いた。それもガルデモの曲が鳴るタイマーだ。これならみんなが注目するはずだが、

(あれ？鳴らない。)

タイマーを見てみると、セットし忘れていた。

「ちくしょお！…やられたまるか。」

俺は災いの元である椅子を投げ捨てる。すると空中で椅子についていた推進エンジンが動き出し、スピードを上げて余裕をかましていた日向に激突、そのまま開いていた窓から外に飛んでいってしまった。

この後の4時間目は大山が天使に告白し、振られたり、その後は、俺たちは飛びまくったのだった。

テスト期間も終わり、

「流れ始めたわ。天使の全教科0点の噂。それも教師を馬鹿にするような解答ばかりだと。」

そりやそうだ。俺たちが将来なりたいものとか、宇宙人に侵略された設定でとかつて書いたのだから。

「でも教師は、そんなの天使自身じゃなく、誰かの仕業だつてわかるだろ?」

音無が尋ねるが、ゆりは、

「何度も言わせるの? そんなことは教師には分からない、現実と同じ。生徒会長が不真面目な答案を提出してきた。なら、使自身を呼び出して叱るに決まってるでしょ?」

そんな可能性を切り捨てる。

「立華は弁解したんだろうか?」

音無が言つ。立華というのは天使のことである。本名は立華奏といひらしい。

「さあね? しかも全教科だしね。全教科の教師にビビりやつて弁解するのよつて話よ。」

「教師からしてみれば、ま、一人きりの反乱つてところだろ。」

ゆりと日向が言つ。

さすがにこのままで言つのはいけないだろ? そう思い、戦線メンバーがいなくなつた後、ゆりの元へ行き、

「あの娘は本当に天使か?」

「分からぬわ。」

「ゆりも薄々気づいてるんだろ? あの子は俺たちと同じ人間だつて事を。」

俺の言葉に黙り込むゆり。やはりそうなのか。

「悪い。話はこれだけだ。」

俺はそういうて校長室を後にした。

「屋上」

「・・・アオバさん元気ないですね。どうしたんですか？」
遊佐が声を掛けてくる。

「なあ、もしや・・・天使が仲間になる可能性があるなら仲間にしたいか？」

俺は空を見上げながら言った。

「・・・何か分かったのですか？」

「・・・ちょっとな。」

言葉を濁してしまう。

「そうですか。私はアオバさんの決めたことなら構いません。」

そういう遊佐の声はどこか寂しそうだった。

第18話「赤点大作戦！」（後書き）

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第19話「my memory」

テスト期間が終わった数日後、現生徒会長、立華奏は会長職を辞任した。

辞任というよりは解任なのだろうが、会長が問題行動をとったなどという事実は体裁が悪いらしい。

直井というナルシスト少年が生徒会長代理になつた。

時刻は夕方、俺は天使と呼ばれる少女、立華奏に会つていた。

「お前はこれで良いのか？」

「・・・何が？」

「お前だったら俺たちがやつた事ぐらいわかるだろ。だったら筆跡証明でもすれば疑われなくてすむじゃないか。どうして・・・」

「彼女達もこここの生徒だから。私が受け入れてあげないと・・・。」

「そういう彼女はどこか寂しげだった。」

その日の夜・オペレーション・コントルネードが行われた。
だがいつもと天使の様子が違う。戦う気が無いようだ。

そして彼女は食券機の前に行き、激辛で有名な麻婆豆腐を買つていた。

これにはゆりも驚きを隠せないでいた。

『・・・ゆりっぺせん。盛り上がりは最高潮を迎えてるところを見受けられますか？指示を。』

ゆりの通信機に遊佐から連絡が入る。

「回せ。」

そして旋風が巻き起こり、生徒達の食券が宙に舞う。天使が買った食券も。

食堂の席に座り、いつものように食事を取つていると、

「アオバさん、天使のことで悩んでいるのですか？」
遊佐が心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。

「少しね。」

「私はいつもアオバさんの味方ですから。たまには頼つてください。」

「ありがとな、遊佐。」

その時、食堂の扉を勢い良く開き、腕章を付けた生徒達が押し入ってきた。

「なんだ貴様らはーー！」

野田の放った言葉から、戦線メンバー達はざわめき始めた。

俺は遊佐の側に駆け寄る。

他の戦線メンバーは一般生徒に手を出すわけにはいかず、動搖を隠せていない様子だった。

そんな中、生徒会長代理の直井が前に出てきた。

「そこまでだ。色々と容疑はあるが、とりあえず時間外活動の校則に則つて、全員反省室へ連行する。僕が生徒会長になつたからには、貴様らに甘い選択はない。・・・連れていけ。」

その声と共に一般生徒達が無理やり戦線メンバーの動きを封じる。

それはアオバも例外ではなく、

「やめろーー！その娘にだけは手を出すな。」

必死になつて遊佐を守ろうとするが4人の男子生徒に無理やり押さえつけられ動けなくなる。

そしてアオバの目の前で遊佐が連れて行かれた。

その瞬間、アオバに異変が起きた。

頭を抱え込むアオバ。

「どうした、アオバーー！」

音無が叫ぶが、一般生徒に拘まれ動けないでいた。

（・・・俺はまた・・・守れないのか？たつた一人の大変な人を・・・）

脳裏に遊佐の顔と、もう一人、黒髪のきれいな女性の顔が映った。

「思い出した・・・」

アオバの生前の記憶が戻った瞬間だった。
そして俺は反省室へ連れて行かれた。

反省室の中では、戦線メンバーが脱出を試みようとしたり、体力を温存していたりとさまざまだったが、俺は部屋の片隅で過去を思い返していた。

・・・『神童』人々は俺のことをこう言った。

なぜならそれは頭が良かつたからだった。

俺は全国模試ではいつも5番以内に入るほどだった。

そのため周囲の期待は大きく、先生にいたっては俺を特別扱いしていた。

そもそもかもしれない。俺が超難関大学に合格すれば学校側の名が売れるそう考えたのだろう。

特別扱いというのは授業に出なくても良いと言つものだった。なぜ

なら学校の授業を受けさせるよりも自分のやりたい勉強をさせたほうが良いだろ」という学校側の判断だった。

だが、その判断に不満を漏らすものもいた。先輩達だった。

「おい 小田桐・・・。お前調子乗つてんじゃねえぞ。」
いつものように帰り道に数名の先輩達が待ち伏せしていた。
俺はいつものように無視して横を通り過ぎようとするが、肩をつかまれる。

「いいんですか。俺に手を出して。周りは黙つちゃいませんよ。」
忠告した。学校が一番期待している生徒。その生徒に暴力を振るつたことが先生に知れれば彼らは退学になるだろう。

「ちつ！ちつ！」
肩をつかんだ先輩が舌打ちをし、手を離す。俺はそのまま家路に着いた。

神様というのは不思議なもので、こんな俺にも友達が出来ていた。
それに彼女までいたのだ。

「おはよう。はいお弁当。」

目の前には黒髪の長いストレートの少女が笑顔でお弁当を渡してきた。

「いつも悪いな。みこと。」

俺はそう言い、弁当を受け取る。

彼女の名前は桜野みこと。俺の幼なじみでもある。

俺たちは付き合っているのだが、そのことを知っているのは同級生のそれも物凄く仲の良い友人だけである。

「・・・今日も図書室でお勉強？」

「まあな。」

「そりなんだ。じゃあ放課後に来るから待つでね。」

彼女はそう言い自分の教室へ向かって行つた。

第19話「my memory」(後書き)

いかがでしたか?

次回はいよいよアオバの過去が明かされます。
ちょっと暗い感じになりそうです。めも
次回もお楽しみに。

第20話「last memory」

4時間目終了を告げるチャイムが鳴る。

授業に出す、図書室にいた俺はいつものように自飯の準備をするため、手を洗いに図書室からでた。

荷物を持ち、手洗い場で手を洗う。そして屋上へ向かう。屋上には滅多に人の出入りが無く、ここに来るのは俺と俺の友達ぐらいである。

そして屋上のドアを開けると、

「チツ、小田桐かよ。」

そこにはいつも絡んでくる先輩達の姿が。

場所を変えるか。そう想い立ち去り出すと、

「お前、一人で飯食うのか。一緒に食べるやつもいねえのかよ。寂しい奴だなあー。」

先輩がここだとばかりに俺に悪口を言つてくる。

俺は無視をしようと決め込み、再び移動しようとドアを開けたとき、

「アオバ君、いる?」

そこには今一番来て欲しくなったみことの姿が。

まだ先輩達からはみことの姿が見えないはずだ。

「帰・・・。」

「アオバ君! 会いたかった。」

俺の言葉はみことの声に遮られ、抱きつかれる。

マズイ。先輩達の顔を見る。驚いていた。

彼らにとつて唯一俺を馬鹿にできただことが、目の前で起きている光景を見たせいで、出来なくなっていた。

それも友達ならまだしも彼女といつことが余計にマズイ状況を作り出していた。

「いくぞ。」

状況を飲み込めていないみことの手を取り、みことだと気づかれていないことを願いつつ、階段を駆け下りた。

昼飯をみことと共に食べ、5時間目の授業が始まる。

「小田桐、めずらしいなあ。」

先生に言われる。珍しく俺は授業を受けている。

なぜならみことに先輩が何かしてくるかもしれない。そう思い俺は授業に出ている。

みことを巻き込むわけにはいかない。彼女は巻き込まれなくて良いのだから。

授業時間はこれからどうするかを考え、チャイムが鳴ると同時に行動を開始した。

俺の信用のできる友達数名に声をかけ、みことを家まで送つていつてもうよう頼んだ。

俺が一緒に行くと、また先輩が絡んでくるかもしれない。そう思つたからだった。

友人達は快く引き受けてくれた。本当に頼もしい。

そして放課後、俺はいつものように図書室へ行き、荷物を席において、トイレに向かった。

トイレを済ませ、手を洗っていると、携帯電話が鳴った。友達からだった。

「どうした？」

『アオバ。お前のところみことちやんが来てないか？みことちやんお前に渡すものがあるからって言つたきり帰つてこないんだ。』
電話越しに心配そうな声でそう言われた。

「お前は昇降口で待つてくれ。」

そう言い、電話を切る。

俺は急いで図書室へ戻る。いつもはいるはずの先生の姿は無い。そしてそこにはみことの姿と・・・

「よお 小田桐！！」

先輩達がいた。先輩は4人である。

みことは早足で俺のところへ来て後ろに隠れる。その顔は今にも泣きそうだった。

「悪いのはその娘なんだぜ。俺たちの邪魔をしちゃつとしたからさ。

「ヤニヤと、やつをながら言ひ先輩。

「・・・・アオバ君の・・・持ち物に・・・悪戯しそうに・・・してたから・・・。」

涙声で必死に伝えてくるみこと。

「わりこ。みこと。お前は先、帰れ。」

「・・・でも。」

「いこからつ・・・・・」

自分でも思つたより強い声が出ていた。

「お前は早く帰つてくれ。お前がここにいると迷惑なんだよーー。」

「・・・先生を呼んで・・・・・」

「いいから帰れ。」

そして俺はみことを見て、

「・・・これは俺の問題だ。お前はもともと巻き込まれる理由なんてない。全部俺の責任だ。」

そういう俺の顔はきっと怖かっただろう。

それでもみことは涙をぬぐいながら、俺に笑顔を見せ、

「ありがと。明日は一緒に帰ろうね。」

そういうつて図書室を走つて出て行つた。

これでよかつたんだ。

俺がこれから行うこと・・・

それはみことが無事あいつらと会つて学校を出るまでの時間を稼ぐこと。

先輩の一人がみことを追いかけようとするが、

「つお！？」

先輩を得意の護身術で投げ飛ばす。

これでも俺は護身術を一通りは使うことが出来る。

「悪いが・・・」ここから先には通すわけには行かないんで。」

あと一分、あと一分で確実にみことの身の安全が保障されるだろう。一分間彼らを足止めさえすれば。

だがそんな願いもむなしく、3人一斉に突っ込んでこられる。何とか1人を跳ね除けることに成功する。

そのとき俺の視界の隅に図書室から出て行く先輩の一人が入った。マズイ。みことが危ない。

目を向けてしまったその時、ドン・・・一瞬の隙をつかれ残り2人の先輩の体当たりをモロに受け、空中で吹き飛ばされる。そして俺の落下する先には本棚の角が。

俺、死ぬな。そう思ったとき、思い出がスロー・モーションで流れてくる。

これが走馬灯つてやつか。もう死ぬんだな。

・・・みことは無事逃げ切れたかなあ。ちゃんと守つてやりたかったなあ。ちくしょあ・・・。

そして最後に・・・

・・・明日一緒に帰りたかつたなあ。

そう思った瞬間、俺の意識が消えた。

第20話「last memory」(後書き)

いかがでしたか?

その後、みごとがどうなったかは皆さんの「想像にお任せします」。

次回もお楽しみに。

第21話「戦線の危機」

「出て良いぞ。」

反省室に入れられ、数時間後、ようやく解放される。

腕を上に伸ばして伸びをする者、文句を言いながら出て行く者、上半身裸になつている者など思い思いの行動をしながら、反省室を出て行く。

そんな彼らと共に校長室へ向かつて行った。

「……で、これから活動はどうしますか？」

高松がゆりに尋ねる。

「……試しにちょっと動いてみましょ？ とりあえず、それぞれ好き勝手に授業を受けてみて。あ、一般生徒の邪魔はあんまりしないように、以上、解散。」

ゆりがそう言つて、戦線メンバーは部屋を出て行く。

音無が部屋を出よつとした時、ゆりは彼に声をかけた。

「音無くん。これ、あんた持つてなさい。」

言つて彼女が差し出したものは、トランシーバーだ。

「え？ それ……では貴重なものなんじや？ 何故俺なんかに？」

「・・・いいから。」

小首を傾げながらも音無がトランシーバーを受け取り校長室を後にす。

「どうしたの？アオバ君、あなたも行きなさい。」

ゆりが突っ立っていた俺に声を掛けてくる。

「なあ・・・ゆり。俺、記憶が戻ったんだ。」

俺の言葉を聞き、ゆりは驚きの表情を浮かべたが、すぐにいつものリーダーの顔に戻り、

「そう・・・でもその様子だとあまり良い記憶じゃ無いみたいね。」

「

そう言つた。

しばりくゆりは考え、

「その様子だと作戦に参加できそうに無いわね。それならあなたは今から遊佐のところにこきなさい。そしてあの娘にだけはあなたの記憶を話なさい。」

それだけを言つとゆりは校長室から出て行ってしまった。

「・・・アオバさん、突然どうしましたか？」

遊佐に聞かれる。俺は歩いていた彼女を引きとめ、中庭のベンチまで連れて来ていた。

「・・・「めん。あの時守つてあげられなくて。」

「いろいろ並べ」とはあるが、一番最初に「」の言葉が出ていた。

「いいです。アオバさんは守ってくれました。それだけで充分です。

」

遊佐は言つた。

「ただ・・・。」

「ただ?」

「あまり無理はしないで下せ。心配してしまいますから。」

「分かつた。約束する。」

その後遊佐に記憶のことを持ちた。遊佐は驚くことも、同情することも無く、ただ淡々と受け入れていた。

4時間目が終わるころ、俺と遊佐はガルデモの練習風景を見に教室まで来ていた。

一通り演奏が終わり、ボーカルのユイが近づいてきて、

「先輩、今の演奏どうでしたか?」

とか、ひさ子が、

「あんた、麻雀強いんだって? 藤巻に聞いたよ。今度一緒に打とうぜ。」

とか、関根と入江に、怖い話をして、怖がらせたりと何事も無く時間が進んでいた。

だがそれも長くは続かなかつた。

遊佐の通信機に連絡が入る。ゆりからのように。

『遊佐、こひらゆり。現在私達は直井率いる一般生徒と戦闘中よ。ゆりの声とともに発砲の音も聞こえてくる。

「・・・一般生徒と何故交戦しているのですか?』

『直井はN.P.C.じゅなく、私達と同じ人間だったのよ。他の一般生徒はたぶん操られているわ。遊佐は各戦線メンバーに連絡をお願い。非戦闘員は校長室へ、戦闘員はグラウンドに来るよう報告頼むわ。』

『 そう言い通信が切れる。

それと同時に4名の腕章をつけた一般生徒達が手に銃を持ち教室に入ってきた。

ゆりの報告は本当だつたようだな。

怯える入江たちを後ろに庇い、俺も銃を構える。すると俺の横にユイが来た。

「ユイ、下がつてろ。』

俺がそう言つが、いつこいつに下がひつとしない。

「先輩一人に任せせるわけにはこきません。いつもてもユイにやんは強いんですから。』

「そんじゅいきますか。』

ユイが動じたとした時、ドアの近くにいた一人の男子生徒が倒れる。

「助けにきたでえー。」

そこにいたのは鶴野だった。手には紙のハリセンではなく、鉄で出来たハリセンが握られていた。つてかハリセンは変えないんだ。

鶴野の登場により、

一般生徒が鶴野を見て、一瞬の隙が出来た。俺とユイはその隙に動き出し、俺は護身術で一人を投げ飛ばす。ユイはドロップキックを浴びせる。

最後の一人も何とか気絶させることに成功する。

「本格的に始まつたみたいだね。あたし達は校長室に行くことにしようか。」

ひさ子が言った。それに異論を唱えるものは誰もいなかつた。

遊佐たちを校長室へ連れて行き、戦闘要員の俺と鶴野はグラウンドに来ていた。

「何だよ。これ・・・。」

思わず自分の目を疑つてしまつ。

土砂降りの雨の中、地面は真っ赤に染まつていつた。

そしていたるところに血を流して横たわる戦線メンバーの姿が。

それなのに一般生徒は全員無傷で次々と戦線メンバーを射殺してい

く。

するとゆうと日向が互いに背中を預け戦っている姿が。俺たちも銃を手に持ち2人に加勢しに行く。

「悪い、遅くなつた。」

「遅いじゃない。まあその様子だと遊佐とはうまくいったみたいね。」

安堵の表情を浮かべるゆう。だがそれも一瞬で引き締まつた顔つきに変わる。

「後は音無に掛けるしかないな。」

日向が言つ。

「何弱気になつてんだよ。もう少し頑張りや。そして俺たちは最後の反抗にでた。」

結果的にいふと、惨敗だった。

一般生徒には手を出せない。直井は一般生徒たちの後方にいる。まったく近づく」とさえ出来なかつた。

腹に痛みを感じながら横たわつていると、日向が直井に蹴られていた。

俺は落ちていた銃を拾おうと手を伸ばすが、一般生徒に足で踏まれ、

失敗に終わる。

その時、音無の声が聞こえた気がした。

そこで俺の意識が途切れた。

第21話「戦線の危機」（後書き）

いかがでしたか？

次回はモンスター・ストリームの話を書こうと思っています。

次回もお楽しみに。

第22話『Monster stream?』

「何でお前がここにいるんだよ。」

校長室に入るなり、俺は目の前にいた『ソイツ』に言った。

「僕は神だぞ。どこにいたって関係ないだろ？。この愚民が。」

そういうて堂々とソファに腰掛ける直井。

「なんかこの人も仲間になつたみたいですよ。」

田向に新技の実験台を頼んでいたユイが答えた。

「ここには音無に抱きついて、大泣きしてたんだぜ。」

直井の横にいた田向が大笑いしながら言う。そんな田向に直井は顔を寄せ、

「誰が泣いたつて？泣くのは貴様だ。まあ洗濯ばさみの有能さに気づくんだ。」

そう言うと直井の両目が赤くなつていぐ。そのまま見てしまつている田向。

「洗濯ばさみにも劣る自分の不甲斐なさを・・・嘆くがいい。」

そう言い、直井はテーブルに洗濯ばさみを転がす。

「せ・・・洗濯ばさみ・・・挟める・・・挟んで落ちない・・・洗濯物が汚れない・・・素晴らしい、ああ、クリップ代わりに紙を挟んだりとか応用も効く、使える、それに対して俺は何なんだ！？」頭を抱えて、嘆き始める田向。横では直井が勝ち誇ったような顔をしている。

「お前、催眠術を腹いせに使うな。」

音無が直井の首根っこを掴んで言つ。

「音無さん、おはよびいざります。」

先ほどの口向や俺に対する対応とは全然違うなーこと。

校長室のドアがゆっくりと開く。そこから顔を出したゆうは、

「音無君、直井君用があるの。ちょっとこっちに来なさい。」

そう言つて2人を連れて行つてしまつた。

音無達が校長室を出て行つて少し時間が経つた後、
『小田桐アオバ、職員室まで来なさい。』
放送が入る。俺、なにかやらかしたか？

とにかく職員室まで向かつた。

職員室の中に入る。

すると放送をした教師がやつてきて、職員室の奥に連れて行かれる。ソファーに座られ、教師が口を開いた。

「小田桐、生徒会に興味はないか？よかつたら副会長になつてもいいんだ。」

はつ！？俺をからかつていいのだろうか。だが教師の顔は真剣である。

「なんで俺なんかが？」

「」の間のテストで君は学年で一番だったんだ。君が生徒会に入る」とに私達職員は皆賛成している。どうだろ? 入つてみないか?」
要するに天使が生徒会長を辞任し、直井が生徒会長代理になつたことで、副会長の座が空いた。それで俺を入れて空いた穴を埋めようといつわけか。だが・・・

「悪いですがお断りさせていただきます。」

丁寧に断つた。その行動に先生は、驚き、「どうしてなんだね?」と質問してくる。

「俺は生徒会になんか興味はないし、それに俺よりもっと適任なやつがいます。」

立華奏という最高の生徒会長が、と言葉には出でない心の中で思いながら、職員室を出て行つた。

いつものように校長室に集まり、ベレー帽を被つたゆりから今回の作戦が発表される。

「今回のオペレーションは・・・モンスターストームよ。」

その言葉を聞いた瞬間、戦線メンバーが叫びや悲鳴をあげる。

「おおおお・・・モンスターって・・・。」

思わずあきれてしまう。

「何なんだ、その作戦は? モンスターなんてのがいるのかよ、」の

世界には…！」

音無が驚きの声を上げる。

「ええ、川の主です。」

高松が眼鏡を上げながら冷静に言つて。

「川の主？」

「ちょっと歩いたところに川があるだろ？そこで食料の調達だ。」

音無の問いに日向が答える。それって魚釣りじゃん。

だが眞はやる気満々の様子だった。

遊佐たちを誘つて俺も行くか。そう思い眞を呼びにいった。

俺は今、遊佐とひさ子と関根と入江と一緒に川へ向かっている。他の戦線メンバーは先に行つてしまつている。

「楽しみだね。みゆきち。」

「そうだね。しおりん。」

さつきから関根と入江は上機嫌である。

しばらく歩くとようやく戦線メンバーと会流したが、そこには戦線メンバーと一緒に釣りをしている天使の姿が。

それを見た遊佐たちは怖がつて俺の後ろに隠れる。だが天使がみんなと一緒に釣りをする姿は楽しそうだった。

いかがでしたか?
次回もお楽しみに。

空は広いなあ。

釣りをしていた俺は空を見上げて思つた。

「喰らえみゅあち。」

「あやつ！！」

それにしてもなかなか魚が釣れない。

「遊佐ちゃんにもーー！」

「・・・お返しです。」

「つて釣れるかーー！」

俺は思わず目の前の光景を見て言つてしまつた。俺の釣りをしているあたりは女子勢が水遊びをしてはしゃいでいるため魚なんているわけも無く。

「アオバ君も遊ぼうよ。」

入江が声を掛けてくる。だがその姿に、思わず目をそらしてしまつた。

水に濡れてしまつたせいで、下着が透けて見えていたのだ。他の女性陣も同様だが、みな気づいていないのかわざとなのか気にする様子を見せない。

「お、俺は休憩しどくよ。」

そういつて視線を空に向けた。

空は青い。あつ、いま竹山が飛んでたな。

少し時間がたつと、上流の方から、田向の叫び声が聞こえた。

俺は急いで上流へ向かうと、ちゅうじ三の主であらう大きな魚が宙に浮いていて、空中に投げ出された戦線メンバーを食べようとしていた。

「こまま落ちたら食われるぞ。」

「C r a z y f o r y o u !」

「神は落ちない。」

皆が悲鳴を上げる。

その時、立華が動いた。

「助けなきや。」

次の瞬間、立華の中からもう一人の立華が飛び出したかのように見えると、空中で川の主が細切れになっていた。

「……ひつやしばらぐトルネードしなくともいいんじゃないかな。」

目の前には大量の細切れになつた川の主がある。

「うん……捨てるのもなんだしな。仕方ない、一気に調理して一般生徒にも振る舞うか?」

音無の提案に一同は賛成し、グラウンドで調理が行われることになつた。

「グラウンド」

「アオバ君、上手だねえ！」

調理をしていると横から入江が覗き込んできた。

「そうかあ？」

俺は普通に言われた通りに野菜を切つているだけなのだが。

「いやいや上手いよ。良いお嫁さんになるよ。」

つてか俺は男だし。

「・・・では私がアオバさんをお嫁さんにもらいます。」

いつの間にか隣に来ていた遊佐が話に入つてくる。いや、俺は男だから。

「遊佐ちゃんつたら大胆だねえ。」

「ヤニヤしてこちらを見てくる関根。」

「でもねえ・・・。」

関根が入江を自分のところに引き寄せると、

「アオバ君はみゆきけとくつくふんだよ。」

と大声で叫び出した。

その瞬間、俺と入江の顔は真っ赤になり、近くにいた戦線メンバーから注目される。

「・・・浮気はしないでください。」

耳元で遊佐が小さな声で呟いた。

だが俺はふと思つた。天使はもつ敵では無くなつた。
じゃあ俺たちは何と戦うのだろうか。

戦線は無くなるのだろうか。

そして俺たちの向かう先には何が待つてゐるのだろうか。

一般生徒にも料理を振舞つた後、皆で後片付けをしている。
俺は食器を家庭科室に返しに行つたあと廊下を歩いていると、‘ゆり
に会つ。

ゆりは息も荒く、とこりとこりと切り傷があつた。

「大丈夫か？ 誰にやられたんだ！？」

俺が駆け寄ると、‘ゆりは、

「・・・天使。」

そう言って自分が来た道を指差す。

そこには紛れもない天使の姿が。

だが立華は音無達と一緒にいるはずだ。では目の前にいるのは誰な
んだ？

「・・・あら、こんなところにも校則違反をしているものがいたの
ね。ちゃんと校則は守つてもらいたいわ。」

そつといつて天使の手から *and sonic* が現れる。
やはりいつもの立華とは違う。なんだか攻撃的だ。

「ゆりは音無達のところへ行つてくれ。少しごらい時間は稼ぐから
よ。」

そういうつて手に椎名からもらつた煙玉を握る。

「・・・ありがとう。健闘を祈るわ。」
ゆりが壁に手を当てながら歩き出す。

天使が追おうとするが、俺は煙玉を投げ、邪魔をする。

「ちょっと付き合つてもらおうか。」

「少しほお仕置きが必要な用ね。」

そして同時に動いた。

俺は後方から迫つてくる天使を銃で撃ちながら距離を取つて、うつちに、屋上にまで来ていた。
もう逃げ場は無い。

だが一つ分かつたことがある。こいつは俺たちが今まで戦つていた天使とは違う。

だから安心できた。遠慮せずに戦えるのだから。

「最後に一花咲かせようかな。」

銃を乱射し、距離をつめていき、得意の護身術で天使の関節を取る。

だが天使は慌てることなく、

「・・・『harmonics』」

その瞬間天使が2人に見えた気がした。

すると背後から、

「お遊びはここまでよ。」

と聞こえたと思つと、後ろから腹を刺された。

鋭い痛みがくる。

そして倒れていくなか、天使は屋上から下を見ると飛び降りていった。

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第24話「Dancer in the Dark?」

田を覚ますと視界には白い天井が見えた。
隣を見ると何やら戦線メンバーが話し合っている。

体を起こすと、白向が、
「田、覚めたか。」
と言つた。

「ああ、それより天使はどうなつた？」
俺はベットから降りながら言つた。ゆりたちが集まつているところには保健室のベットで寝ている立華の姿もあつた。

「あの天使なら本物の天使と相打ちになつたわ。今は寝てる。傷もじきに治るわ。」
ゆりが自分の怪我したところの手当てをしながら言つた。

「でも、同じヤツが2人つてどういつことだよ？ そんなわけわかんねえ世界になつちまつたのか？」
田向がゆりに尋ねる。

「理由ならあるわ。天使エリアへの進入ミッション覚えてる？」
ゆりが腕を組みながら言つた。

「ああ。」

「彼女のマシーンにスキルを開発するソフトあつたでしょ。」
たしか『Angel Player』だつたか。ゆりから話を聞いたことがある。

「その中に見たこと無い能力がいくつかあつた。その一つ『harmonic』っていうスキルが発動していたのよ。」

「どんな能力なんだ？」

音無が尋ねるが、ゆりが口を開く前に、

「分身の能力なんだろ。」

俺が言つた。

「アオバ君良く知つてるわね。」

ゆりが驚く。

「まあとにかく2つに分かれるのよ。みつは彼の言ったとおり分身ね。」

「つまりはそれも天使自身がソフトウェアで開発したスキル、ということですか。」

高松が眼鏡を上げながら言つ。

「しつかし、そつくりそのままつてわけじゃ無いって感じだつたぜ。」

「

「『コイツ』と違つて好戦的だ。なぜだ？」

「奏は自分を守るための能力しか使わない。刃にしたつてそうだ。兆弾させるためだ。」

藤巻、白向、音無の3人が言つ。

「まったく無能な集団だな、貴様らは。あつ、もちろん音無さん以外ですが。」

直井が言つ。

「基本はアホの集まりですから。」
ユイが人差し指を立てて言つ。

天使がなぜ好戦的になつたか・・・考えられるのは、

「強い攻撃の意思を持つていてるときに分身を発生させたからか。」

俺は頭にモンスターストリームの群のことを思い浮かべながら言つた。

「その通りだ。」

直井が言つ。

「なるほど・・・そのときの本体の命令に従い続けてこらつてこと
か。」

「でも、奏が強い攻撃の意思を持つことなんて無い。」

音無が否定しようとする。

「どうでも良いけど、あなたやけにあの娘を庇つうのね。」
ゆりが聞く。

「やうやあ・・・かわいそうだろ。」

「まあ良いけど。」

「今の問題は天使をいかにして消すかだな。」

直井が言つ。

「意図的に出したなら意図的に消すことも可能じゃないのか?」
松下五段が壁にもたれながら言つ。

「いいや、多分無理だろ。意図的に出せるなら天使ほりつしてやられてはいなはずだ。」

日向が天使を見ながら言つ。

「おそらく・・・無意識での出現ね。だから彼女には消せなかつた。刺し違えてでも殺のしかなかつたのよ。」

ゆりが仮説を唱える。

「それに彼女は私達を更正させようとする意思だけは立派に継承されている。さらに好戦的、最悪ね。」

ゆりが肩を落とす。

「対抗しようとも時間が無駄過ぎるや。」

「少し時間を頂戴。」

ゆりが言った。

「どうやつてその時間を作る?」

「授業に出て、そして受けける振りをして。先生の話には耳を決して傾けないで。授業をまともに受けたら消える。分身にばれないように別の作業に没頭すること。そして一日持ちこたえて。誰一人消えずに再び会えることを祈るわ。」

そして授業が始まり・・・。

ある者はイヤホンを耳にあて音楽を聴き、またあるものは落書きをしていたり、肉うどんを食べていたり、それぞれで別の作業を行つていた。

（保健室）

「しくつた……」

目の前のベットには立華の姿は無く、部屋は荒らされ、まるで戦闘でもあつたかのような状況である。

「IJの乱れよひはさらわれたとしか思えない。貴様何をした？」
直井がゆりを指差して言つた。

「貴様つて……プログラムの書き換え。もつ一度あの娘が同じ力をえれば、追加した能力が発動して、本体に戻るはずだつた。」

「そんなことが出来たんですか？」

高松が聞く。

「そりや できるだらうな。所詮はパソコンコーダだからな。」

俺は高松に返答した。

「でも敵の行動が予想以上に早かつた。あの娘を隠されたら打つ手が無い。」
ゆりが険しい表情になつていく。

「どうするんだ？」
「探すしかないじゃない。」

「凶悪な天使の田を逃れつつですか。」
「授業を受ける振りでさえやつとだつたのよ。」
「陽動がどれだけ持つか……。」

「だよな・・・」

日向と俺がユイを見て言つ。

「えつ！？陽動つてあたしですか！？」
ユイが自分を指差しながら驚いている。

「お前何のためにガルデモに入つたんだよ。」「岩沢さんに憧れて・・・」

「ガルデモは陽動のためにあんだよ。」「日向がユイを指差して言う。
「いやいやいや、出来ないですって。」「ユイが凄い勢いで嫌がつてている。

「頑張れ。」「一言声を掛けると、
「何様じやお前ら！」「ユイが切れた。

「「「」」」じやお前の先輩だ！」「

俺と日向の声がハモる。

「先輩か！すいませんでした。」「

日向の胸倉を掴みながら叫ぶ。

「あのライブ中漏らすかもしれませんのがやつてみます。」「
ユイがゆりの方をむき、敬礼しながら行つた。

「決意はありがたいけどまだ良いわ。まず今できることをしましょ。総員に通達、天使の目撃情報を集めて。」「

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第25話「Dancer in the Dark?」

（体育館）

「迅速に集められた情報から、幽閉場所の可能性が高いと分かったわ。となればその最深部ね。」

ゆりがみんなの前に出て説明する。その隣には遊佐の姿もある。

「あの爆破した場所にか？」

「そう。トラップも稼動したまま、もつとも危険でもつともここから離れた場所つてことになるわね。」

ゆりの答えに他の戦線メンバーが肩を落とす。

「皆様のために漏らしながらも歌い続けます。根性見せます。」
ユイが涙目になりながら言つゆり。

「あんなのかかつちや陽動も瞬殺よ。今回は陽動なし。正々堂々と行くわよ。」

戦線メンバーの顔を見渡しながら言つゆり。

「作戦はギルドを降下して、その最深部にて無事天使のオリジナルを保護すること。・・・オペレーションスタート！――」

戦線メンバーがギルドへ入つていく。
俺も入るつとしたとき、遊佐に声を掛けられた。

「・・・アオバさん。」

「どうした、遊佐？」

「・・・」の作戦は多分今まで一番危険だと思われます。」

遊佐が俯きながら言ひ。

「そうだね。」

「・・・ですから無事に戻つてこれたら、話したいことがあります。だから絶対に帰つてきてください。」

そう言つて遊佐は体育館から出て行った。

「ギルド連絡通路・B4」

「前のトラップはそのまま放置されてるな。ラッキー。」

「あの・・・こんなところで天使に出来へわしたらどうの道、漏れそぐんですけど。」

ユイが不安そうに言ひ。

「構わん。」

俺と日向がハモる。

「構つてくださいよーーー。」

「あつ。」

ゆりが声を上げる。そして目の前には天使の姿が。

「早速現れたわね、撃て！！」

ゆりの号令の下、全員が銃を構える。それと同時に凄いスピードで走りこんでくる天使。

ブショウシュッパショウ - あつという間に銃が斬られ、使えなくなる。

「まだハンドガンがある。」

ゆりはそう言い、手榴弾を天使田掛け投げつける。

「ガードスキル・・・『distortion』。」

そのまま天使の田の前で爆発する。

「各個射撃！！」

ゆりが間髪いれず、銃弾を打ち込む。

「意外と早くケリが付きそうね。」

ゆりが笑みを浮かべていったその時、

「ぐあ・・・な・・・に・・・！？」

そこには心臓を後ろから突き刺された野田の姿が。

「天使がもう一体！？」

思わず驚きの声を上げてしまう。

「ようは敵が増えているという事ですか。」

高松が冷静にいう。

「各個射撃！！」

再びゆりから指示が来る。だが、もう少しで残弾が尽きそうだ。

「忙しそうね。」

後ろから先ほど倒したはずの天使が起き上がつてくる。

「入り口を塞ぐわ。付いて来なさい。行くわよ。」

ゆりは正面の天使の向こうにあるドアを見つけて言った。

手榴弾を投げつけ、そのときに発生した爆煙に身を隠しながら進んでいく。

「あと10秒。間に合わなかつたものは残していく。 10 - 9 - 8 -
7 - - -。」

天使が猛スピードでこちらへ向かつてくれる。

ギリギリで中に入る俺とゆり。

「ギルド連絡通路B10」

またしても目の前には天使の姿が。
銃を向けるゆり。だがそれを松下五段が下ろさせる。
「弾がもつたいなかろう。」

「うおおおおおおお！」

松下五段が天使へ突つ込んでいく。

グッサ！-と松下五段を刺す天使。
だが柔道の押さえ込みを使つていてるからか、天使は身動きが取れない。

「行け・・・俺の意識があるうちに早く行け！-！」

苦痛に顔をゆがめながら言つ松下五段。

「急いで。今のうちに行くわよ。」
ゆりの声の下、皆が走り出す。

「松下君の犠牲は無駄にしない。彼のおかげで分かつたんだけど、」

先に進むにはアレが一番なのよ。天使は体が小さいから動きを封じるにはアレが一番。いくら天使が馬鹿力でも柔道の押さえ込みなら通用する。松下君に教わった柔道が生きる日が来たわね。」

「つまり・・・一人一殺つてことか。」

「そして私達がオリジナルを助け出せれば、彼らを助けだせる。急ぎましょう。」

その後次々と押さえ込みをしていき、犠牲になっていく仲間達。そしてようやくギルド最深部にたどり着き、残っていたのは俺と音無とゆりとコイの4人。

「ここから一気に最下層に降りることになるわ。音無君とコイはオリジナルを探して。アオバ君は私の援護をお願い。見つけ次第『*harmonics*』の発動を促すこと。」

「俺が戦うよ。」

音無が言うが、ゆりは、

「あの娘はあなたを待つてるのよ。」

と言い返す。

「なら私が戦います。」

勢い良く手を上げるコイ。

「弱すぎて話しならない。」

その意見をゆりは一刀両断。

「それに私にはアオバ君がいるから大丈夫。じゃ行くわよ。」

「これが最後の作戦になるといいわね。」

一
あ
あ
」

た
な

下へ滑り降りていくゆり。その後に音無、俺、ユイが続いて降りていく。

「アサヒ」

小さな悲鳴が聞こえてきた。

「あれ、
ドライ
ヤイ
は？」

下に降りたゆりが音無に尋ねる。

「小さな悲鳴だけ聞こえたが。」

「天使の餌食か……。可愛そうに。でもすぐ助けてあげるわ。」

「そろそろ最後かしら。

目の前に天使が現れる

「ほら、アンタはボオーとしてないで天使を探す。」

音無にゆりは言い、音無は天使を探しに行く。

残されたゆりと俺。するとゆりが何かを渡してきた。
見ると耳栓のようだ。つけろということか。

ゆりが発砲したのを合図に天使も動き出す。

ゆりが柔道の投げ技で天使を投げ飛ばす。その後に手榴弾を投げ込む。

俺は投げ飛ばされた先にハンドガンを数発打ち込む。

だがそこには仁王立ちになつて いる天使の姿が。

すると天使が両腕に 出現させていた白刃を上に上げ、

「ガーデスキル『Howling』。」

超音波のようなものが発生するが、耳栓して いるから平氣である。

俺とゆりは共にナイフを持ち天使に突つ込む。

ゆりは天使の正面から腹部に、俺は横からわき腹にナイフを刺した。

一方音無は、オリジナルの天使を見つけていた。

「ガーデスキル『harmonics』。」

もう一人の天使が現れる。

「プログラムの書き換えをしたよ うね。」

「ああ、すべてこいつの中に戻る。」

音無は奏を見て言つ。

「アレだけの数の冷酷なあたし達が。」

「どうこうことだ?」

「分身にだつて意識はあるの。それは消えてしま うわけじゃない。同化するの。あなた達を襲つたたくさん のあたし達がこの娘の中に居るの。それだけの意識を吸い込んでしまつてただで済むと思つの。」

「

天使は笑みを浮かべると、

「

「時間ね。」
「待つてくれ。」

そして天使は同化した。

第25話「Dancer in the Dark?」（後書き）

いかがでしたか？

次回は遊佐の過去について書かれていくと思います。

次回もお楽しみに。

第26話「bad memory」

（校長室）

「これまでにないことです。天使のあんな状態は初めてです。」
高松が言つ。天使は分身と同化したせいで眠つたままになつていた。

「このまま田覚めない」ということも場合によつてはありえるかもし
れません。」

「それこそイレギュラーな事態よ。田覚めるわ。いつか田覚めてた
だ寝すぎるだけという結果に変わる。」
ゆりが机を叩き言つ。

「そのときの彼女はどの彼女なんだ？」
椎名が壁にもたれながら言つ。つてしゃべつた！――

「おお！――椎名がしゃべつた。」

「これはそういう重要な問題つて事だよ。」
皆が驚きの声を上げる。

「まさかやう。それが問題よ。」

ゆりが少し目線を下に下げていつた。

「で、どっちの天使なんだ？」

「それは最初の天使だよ。一緒に釣りをした。」

藤巻の質問に大山が答える。

「だが、俺たちを襲つた意識は全て好戦的で冷酷だった。」

「数でいけば100対1ぐらいだぜ。」

「割合でいけば元のままで目覚める可能性は約1%ってことね。」

「奇跡でも起こられねえと厳しいな。」

ゆりの意見に俺が言ひ。

「でも、手は打つてあるわ。竹山君を天使エリアに送り込んだ。マニュアル翻訳が出来る仲間と共にね。」

「TKと松下は？」

「保健室よ。2人の見張り。」

「データを全て消してログインパスワードを変え、全ての能力を封じるということか。だがそれも一時しのぎでしかない。分かってるのか？」

直井が机に足を乗せながら言ひ。

「分かってる。いつか突破されてデータを打ち込まれる。」

「マシーンの破壊も厳しいな。この学校には大量にあるからな。」

俺が他の案が不可能なことを皆に伝える。

「後は天命を待つだけよ。はたして神は誰に味方するのか？」

校長室での話を終え、白向と大山の2人と一緒に校長室から出ると、遊佐がいた。

「・・・アオバさん。話があるって言いましたよね。付いて来て下さい。」

遊佐にそう言われ、手を掴まる。

「俺たちは氣にするな。行つていい。」

田向にそつこわれ遊佐と共に歩き出す。

「遊佐ちゃん、そろそろあの話をアオバ君にするのかな。」

大山が田向に尋ねる。

「だろうな。だが俺たちが行つてどうなる。アイツの過去は俺たち
じゃあどうしようもなんねえことだからよ。」

遊佐に付いて「行くこと数分、俺たちは屋上に来ていた。

「遊佐・・・? 話つて?」

「アオバさん・・・あなたは地獄を見たことがありますか?」
遊佐が言った。その瞳は真剣であり、どこか助けを求めている、何
かにすがるようなそんな感じだった。

「これは・・・ある女の子の物語です。」

そして遊佐は話し始めた。

「その女の子はいつものように家族みんなで遊園地に行つていまし
た。でも、その帰りに衝突事故にあつてしましました。」

「運が良かつたのかその女の子だけは生きていました。そしてその
女の子は親戚に預けられることになりました。」

「親戚の夫婦は子供が欲しかったけどなかなか産めませんでした。」

「親戚の人は、最初は優しくしてくれました。でも、所詮は養子。親戚の人に自分達の子供が出来たんです。そして親戚の人の女の子に対する接し方が変わりました。」

そこで、遊佐が俯いて、肩が震えていることに気が付いた。

それでも遊佐は話を続けた。

「それから、その女の子は殴る蹴るの暴力を毎日のように受けました。でも始めのほうは殴った後には、「ごめんね」と謝ってくれました。だけど・・・謝つてもくれなくなり、暴力は一層過激になりました。」

遊佐は上のセーラー服を脱ぎ始めた。だが、目の前の遊佐を見て、目を覆いたくなつた。

遊佐の体には至る所に傷跡があるのだ。

「この傷は私が12歳の時に、こつちは14歳の時に・・・。」

一つ一つ説明していく。そのすがたは余りにも痛々し過ぎた。

「これは15歳の誕生日に・・・。」

「もう、やめてくれ・・・。」

俺は遊佐の言葉を遮る。

「酷いと思いますか？でも、誰も私を助けてくれませんでした。先生も友達も近所のおばさんも、みんな見て見ぬ振り。アオバさんは助けてくれますか？」

遊佐は少し触れただけで崩れてしまいそうだった。

助けてやる、そう言いたいのだが、その一言が出ない。
俺の過去・・・みことを守れなかつたことが頭をよぎる。

本当に俺は守れるのか？

結局、その一言が言えなかつた。

第26話「bad memory」（後書き）

いかがでしたか？

暗い感じになつてしましました。

傷は生前の時に出来た物なのでそのままの状態で死後の世界に来
たことになつています。

第27話「Goodbye Days」

あれから天使は田を覚ましたが、凶悪な方の天使であると戦線メンバーの間で噂になっていた。

翌日の朝、全校集会では立華奏のテストのすり替えが判明したこと、が校長から告げられた。

これにより天使は生徒会長復帰を果たすことになった。

「あ～もうつ何で僕がこんな田に…」

「一人残らず暴き出しやがって……」

竹山と田向が呟く。

「そんなこと言つたつてしようがないだろ。早く手を動かすぞ。」
音無が2人に言つ。俺たちはあのテストの時に、天使の答案すり替えを行つたことがばれ、反省文を書かされている。

「あの錐揉み飛行はなんだつたんですか？」

高松が言つと、田向も、

「だよなあーー！」

と同意する。

「おや？珍しく意見が合いましたね？」

「やらされた奴にしか分からねえよ。この気持ちはーー！俺達は錐揉み飛行仲間さーー！」

「ふつ・・・おつと、私を脱がす気ですか？」

「おー、脱いでやれ脱いでやれーー！」

日向が高松を煽る。

「やめなさいよ、うるさいーー！」

ゆりが呆れた様子で言った。

「そうだ！気持ち悪いやめろーー！」

「どうちですか？」

そんないつものような会話の中、俺は一人落ち込んでいた。

昨日、遊佐の過去について聞かされ、自分が彼女に何もしてやれなかつたことが情けなかつた。

遊佐は俺の過去を受け止めてくれたのに、俺は受け入れてやれなかつた。

そのことが胸に引っかかるつて仕方が無かつた。

その様子を察したのか、ゆりは、

「どうしたの？アオバ君？」

と少し心配そうに見てくる。

俺が返答する前に、日向と大山の2人がゆりに田で合図を送つていた。

それでゆりは察したのか、ただ一言、

「後で校長室に来るようだ。」

と言い反省文を書き始めた。

「遊佐の過去を知つちゃ たみたいね。」

部屋に入ると、ゆり、大山、白向、直井の3人がいた。

「アオバ君はこれからどうするの？」

大山が聞いてきた。

「遊佐の過去と本氣で向き合つか、それとも向き合つ氣が無いのなら・・・」

ゆりはやつとつと、一回目を閉じ、再び目を開けてこいつとつた。

「あなたの記憶を消させてもうつわ。」

「なつ！..」

「あなたも直井君の催眠術の凄さは知つてゐるでしょ。」

ゆりはそう言つて窓際に行き、外を眺めながら、

「私はリーダーとして仲間を見捨てるわけにはいかないのよ。あなたが中途半端に答えを出さないなら、それは遊佐も傷つくことになるわ。そんなことさせんわけにはいかない。」

「今すぐに答えを出すよ」とは言わないわ。5日後の夕方までに答えを持って、私のところに来なさい。以上よ。」

時間が経つのは早いもので、もう2回目だ。

「野球の練習を手伝つて欲しいんだ。」

音無に突然そう言われた。

しばらく考えていたが、気晴らしになるかもしないそう思い、

「分かった。」

俺はそう答えていた。

野球場

「ほりあーひやんと球見て打てーー！」

音無がバッター ポックスにいる一人の少女に言った。

「あれえ・・・？」

その少女・・・コイはバットを必死に振っているが、なかなか球に当たらない。

何故俺達がこんなことをしてこるかといつと、コイはホームランを打ちたいらしいのだ。

そのための練習だと音無に聞かされている。

「もう暗くなってきたな。今日はお終いだ。」

音無はそう言い、後片付けを始める。俺もそれを手伝った。

3回目

「掛声ばっか大きくても当たらなこだ。」

「はーい・・・。」

時間は過ぎ、すっかり空は暗くなつていった。

こつものように練習を終え、後片付けをしてくると、

「あれ、日向か。」

日向がバットを持つてこちらに来ていた。

「お前らなにやつてんの?」

「やつてみるか? 本気の野球。」

「フルスイングか。最近してねえや。そつこつのも良いかもな。」

構える日向。

音無の放つた球を、日向のバットが捉え、球は大きな弧を描いて飛んでいった。

4日目

「どうした? 全然振れてねえぞ。」

音無はそう言いながら、球を投げるが、またしてもバットは空をきる。

ユイが腰を落とす。

「ユイ、大丈夫か?」

俺はそう言って、ユイに駆け寄る。ユイの手を見ると肉刺ができるいた。

無理ない。4日連続でずっと野球の練習をしてたら普通そうなるだらうつな。

「所詮無理なんだよ・・・。もつこいや、この夢。」

ユイは立ち上がりながら言った。

「あきらめんなよ。」

音無が引きとめようとする。

「いろいろありがとね。何でこんなことしてくれたの？」

「それは・・・お前がやりたかったことだろ。最後まで頑張れよ。」

コイはバットを肩に回し、こちらに背を向け、話し始めた。

「ホームランなんて冗談みたいな夢だよ。ホームランが打てなくてもこんなに一杯、体動かせたんだからもう十分だよ。毎日部活みたいで楽しかったなあ。」

「言つたでしょ。あたし体動かせなかつたから、だからすぐえ楽し
かつた！..」

「じゃあもう全部叶つたのか？体動かせなかつた時の夢。」
音無が聞いた。

「何でも言つてみる。」

俺も続けて言つ。

「ああ、もう一個あるよ。結婚・・・女の究極の幸せ。でも家事
も洗濯も出来ない、それどころか一人じゃ何にも出来ない迷惑ばか
りかけてるこんなお荷物、誰が貰つてくれるかな・・・。」

「神様つて酷いよね。私の幸せ全部奪つて行つたんだ・・・。」
コイはバットを杖のようにして、微かに震えながら言つた。

「そんなこと・・・ない。」

音無が少し俯きながら言つた。

「じゃあ先輩。私と結婚してくれますか？」

「コイの田はす」へ真剣だった。

「それは・・・。」

「おれがしてやんよーーー。」

突然野球場に響く声。その場にいた全員が声のした方を振り向く。

カラーンカラーン・・・バットが地面に落ちる。

田の前には田向がいた。

「俺が結婚してやんよ。これが俺の本気だ。」

「そんな・・・本当の私を知らないもん。」

「生きてた時のお前がどんなでも・・・俺が結婚してやんよ。もし
お前がどんなハンデを抱えてでも。」

「コイ歩けないよ、立てないよ。」

「どんなハンデでもつたるーーー。」

田向が叫ぶ。

「歩けなくとも、立てなくとも、もし、子供が産めなくとも、それ
でも俺はお前と結婚してやんよ。ずっとずっと側にいてやんよ。」

コイの表情が柔らかなものになつていく。

「ここで出会つたお前はコイの偽者じゃない。コイだ。ここで出会
つたとして俺は好きになつていたはずだ。また60億分の1の確率
で出会えたら、そん時もまたお前が動けない体だったとしてもお前
と結婚してやんよ。」

コイは田に涙をためながら、

「出合えないよ。コイ、家で寝たきりだもん。」

「俺、野球やつてるからさ。ある日、お前んちの窓パリンッて打った球で割つちまうんだ。それを取りに行くとさ、お前がいるんだ。それが出会い。話するとさ、『氣があつてさ、いつしか毎日通りよつになる、介護も始める。そういうのはどうだ?』」

「うん・・・ねえ、そんときはさ、私をいつも一人でさ、頑張つて介護してくれた私のお母さん、楽にしてあげてね。」

「任せや。」

「良かつた・・・。」

ユイはやつて、幸せそうな表情を浮かべながら消えていった。

「お前はこれからどうする?」

「最後まで付き合つや。まだまだ心配なやつが残つてるからわ。」

田向はそう言つと、俺のほうを向き、

「アオバ、俺はやつたぞ。次はお前の番だ。」

力強く言つた。

俺は少し勇気を貰えた気がした。

第27話「Goodbye Days」（後書き）

いかがでしたか？

感動が伝わっていたら良いのですが・・・。

次回は影の出現、そしてアオバがどんな選択をするのかを書いていきたいと思います。

次回もお楽しみに。

第28話「影・そして選択」

ついに5日目。

今日はゆりに俺の決断を伝えねばならない。

校長室に向かっていると、外が騒がしいのに気づいた。

「何だ、あれは？」

運動場を見て、その異様な光景に目を奪われてしまった。

数名の戦線メンバーが銃で対抗していた。

その目の前には黒い影のようなものがいた。

しばらく銃で撃たれると影はあとかたもなく消えていった。

その後、連絡が入る。

「単独行動をせずに、最低でも2人1組で行動してください。影を天使とは別の敵性勢力として対処し、警戒態勢を常にお願いします。」

「

その声を聞いて思わずビクッとなつた。

遊佐の声だったからだ。

影というのは先ほど倒されたやつだろうか。

冷静に考えると他にも影はいるようだな。しかも天使とは別の敵対勢力つて。この世界も変になつたのか？

とりあえず誰かと合流して・・・

「ワイと組まへんか？」

「この声は・・・鶴野か。」

「いいと一緒！？」駄目だ確實にやられる。

そう思つていたその時、再び運動場で銃声が鳴り響いた。

「行くぞ！！」

「おうやでーー！」

運動場へ走る。

走りながらショットガンの弾をこめ、影を撃つしていく。

「助けに来た。」

「・・・助かる。」

椎名がそう呟いた。

鶴野も鉄製のハリセンで影を叩き潰していく。意外と破壊力あるんだな。

その時、

「えつ？」

視界に白い羽を生やした天使、立華奏が舞い降りてきた。その後にゆり、音無、白向、直井もやってきた。

「加勢などいらん。」

野田がハルバードを構えて言う。

「まあ、そう言つなつて。」

銃を構えながら田向が言つ。

椎名は見事な早業で影を倒していく。

TKは華麗な動きで攻撃をかわしつつ、銃で影を倒していく。直井は両手に銃を持ち、堂々と歩きながら銃を撃っている。天使はバツサバツサと近づいてくる影を切りまくつていた。

野田はハルバードを振り回している。
時々仲間にあたりそうになっていた。

そうこうしている間に影の数は減つていき、野田の一振りと俺の銃弾が影に当たり、あたりに影はいなくなっていた。

「みんな無事か？」

「ああ・・・。」

みんな息を切らして疲れている。

「なんなんだよ、あいつら。化物かよ。」

「あんな不気味な存在この世界にはいなかつただぞ。」

「あいつらはなにがしたいんだよ？」

「これは悪夢か？」

「誘い乱れるカーニバール。」

「この世界に長く居過ぎたのかしぃ。」

ゆりが咳く。

「どうこう」とだ？

「ゲームでよくあるじゃない。永久阻止のために出てくれる無敵モンスター。」

「にしても、まるで味方ね。」

ゆりが天使を見て言つ。

「おーい、おーい！！」

「藤巻！..」

藤巻が慌ててこっちに走つてくる。

「高松が・・・高松がやられちまつた！－！」

学習棟・渡り廊下

「僕見たんだ。あの影に食われるところを。僕が出くわした時にはもう影に全身覆われていて、最後には地面に飲み込まれていった。大山が感情を必死に抑えながら言つ。

「イレギュラーすぎる。」

「ちよつとアオバ君。」

それぞれ解散していると、ゆりに呼び止められる。

「この間のこと（遊佐のこと）だけちよつと待つて上がるわ。おやりべ影のことがそれほど深刻な問題であるのだろう。」

「だけど決めたらすぐに言つて。私も少しは力になるから。」
そう言つてゆりは立ち去つて行つた。

翌日・・・

「高松がいたぞ。」

校長室にいた俺らに野田が伝えにきた。

教室では、高松が一般生徒の格好をして、席に座つていた。
話しかけるが、いつもと違う。眼鏡も掛けていないが、何より記憶
が無いようだつた。

その後階段にてゆりは座つて話し始めた。

「何が起きたかわかつたわ。彼、NPCになつたのよ。彼の魂はおさらばあの影に喰われちやつたのよ。」

「それってどうしたことだよ。あいつの魂は消えることも出来ずに永遠にああやつで授業を受け続けるって事か…？」

「そういうことよ。」

田向の問いかへ、ゆりが淡々と答える。

「こんなことが起こりうるのか、この世界は。」

「これじゃあ天使に消されちまつたほうがマシじゃねえか。」

「しかも影は増殖を始めているようだが。」

「ねえ、どうすればいいの？ ゆりつべー！」

そしてゆりは一つの決断を下した。

体育館

ゆりがステージの上で、集まつた戦線メンバーに現在の状況を説明していた。

「この世界に異変がおき始めている。天使とは異なる敵の出現。まんまでなんだけど“影”と呼んでいる。天使と違つて神出鬼没で無差別に攻撃を仕掛けてくる。影に喰われたものは魂を失い毎日授業を受けるNPC化す。」

「現在、無制限で増殖中。原因は不明。打開策も今のところなし。先に、遊佐さんに告げてもらつたように、集団行動で身を守るしかない。」

「さて、こつした危機に瀕する中、この死んだ世界戦線に別の思想を持つもの達が現れ、戦線を新たな道に導こうとしている。その道は現在の危機回避の一つの選択支にも成りえる。なので、そちらの代表として、・・・音無君堂々とここでその思いを語つてもらおうかしら。」

周りがざわめき始める中、音無が前に出て、語りだす。

否定する者もいたが、

「コイは見つけた。俺みたいな人間の肩のまま死んできたヤツでもさ、この世界でコイに与えてやることができた。」

「僕もです。僕は神ですが、それでも音無さんだけが僕に人の心を取り戻させてくれた。経つた一言掛けてくれた・・・ねぎらいの言葉で。」

日向と直井が自分の考えを伝える。

「俺も・・・俺にだつてこの世界で大切なものが出来た。そして大切なものを守りたいと思えた。いや、絶対に守ると、今ここで誓つ。」

俺も自分の考えを伝えた。ゆり、これが俺の答えた。

それを察したのかゆりは俺を見て軽く微笑み、戦線メンバーに視線を向け、

「どの道を選ぶかは、皆に任せるとわ。」

と言つた。

「ゆりつべは？ゆりつべはビリするんだ？」

誰かが言つた。

「私？私はいつだって勝手だつたし、あなた達を守りやしないし、あたしがしたいようにするだけよ。」

ゆつは足を組みながら言った。

「あまり時間は無いわ。各自よく考えておいて。以上解散。」

皆が立ち去り、残ったのは俺、ゆり、音無、口向、直井、鶴野のみ。

「あなたの思いは受け取ったわ。途中まで護衛として、鶴野君をつけておくから。それと、遊佐なら多分屋上に行つたと思つ。」

「ありがと。」

「何言ってんのよ。そういうのは大事な人のためひとつ置いて置きなさい。じゃあ、健闘を祈るわ。」

「おべ。」

ゆつと俺は互いの拳を出し、コシンと当てた。

第28話「影 -そして選択-」（後書き）

いかがでしたか？

あと3・4話で終わる予定です。

クライマックスまで読んでいただけたらありがとうございます。

次回もお楽しみに。

第29話「約束」

廊下

「ゆりつペから大体のことは聞いた。」

隣を歩く鶴野が言った。

「遊佐ちゃんは今きっと辛い思いを一人で抱え込んでるんや。その思いはお前が少しほれ負つてやらな、遊佐ちゃんはきっと精神的に参つてしまつで。」

「分かつてゐよ。」

「最後ぐらにはよお、ワイに良いもの見せてくれなあ。」

鶴野は寂しげに言った。

「どうしたんだよ。急に。」

そう尋ねると鶴野は自分の過去について少し話し始めた。

鶴野は生前は畠田・・・つまり田が見えなかつたのだ。

彼は自分の田でいろいろな物をみたい、そのことが心残りでこの世界に来たといつ。

それが、この世界にきたら、天使との血なまぐさい戦闘ばかり。

それを鶴野は見たくなかったから、オペレーションの時に天使を庇つたりしたといつ。

「そんなに悪いことばかりじゃ無かつたしな。仰山、可愛い女の子も見れたし。そやからな、ワイの最後の我が儘と思つて、遊佐ちゃんを頼んだでさ。」

「了解だ。」

鶴野の思いに答えるように、俺は力強く返答した。

屋上へ行く階段を上つていく。

下の方からズズズ・・・といづ音が聞こえてくる。

「走れ！――」

鶴野が俺の背中を押してくれる。

俺は急いで階段を上るが、鶴野が上つてきていないことにはづく。

「鶴野、お前も上がつて來い。」

俺がそう言つても、いつこうに動くといつじしない。下からは影がやって来ている。

「ワイの仕事はお前の護衛なんや！――お前には生き残つて、遊佐ちゃんを助け出してもらわなアカンのや。そやないと、ゆりつべに令わせる顔も無い・・・それに最後くらいええもん見せてくれや！――」
そういうつて鶴野はハリセンを握り締め、階段を駆け下りていった。

「鶴野――――――！」

俺の叫び声が誰もいない校舎に響き渡った。

静まり返つた校舎の中、俺は屋上へのドアを開いた。

そこには空を見上げるツインテールの遊佐の姿があった。

空には満月があり、それは最初にこの世界に来た時に見た満月のよ

うだつた。

「アオバさん……。」

遊佐がこいつに気がつき、視線を向ける。

「空がきれいだな……。」

「そうですね……。」

しばしの沈黙。会話が続かない。

とりあえず遊佐こちやんと思いを伝えなければ、やつ思つたとき、

「遊佐、危ない……。」

「・・・・！」

遊佐の背後から影が現れたのだ。

影が遊佐を取り込もうとした時、ブシャ・・・・といつぱんビザク・・・
といつ音が響く。

影が徐々に消滅し、ナイフが見え、それを持ったアオバの姿が現れた。

アオバは影にやられたのか、わき腹が少し抉れる様になつて、
出血もしている。

その後ろには、驚いた表情の遊佐がいた。

「どうし・・・。」

「そういえば、まだあの時の・・・遊佐が過去を話してくれたとき
の返答をしていなかつたな。」

遊佐の言葉を、俺が遮る形で言つ。まじめつこしいのは止めだ。

遊佐のあの時の言葉「アオバさんは助けてくれますか?」、その言
葉が脳裏で再生される。

「めんな、早く言つてやれなくて。俺はやつとの言葉を口に出す。

「遊佐を絶対に助けてやる。今みたいに遊佐を襲つてやるやつからお前を守つてやる。」

「・・・」

俺の言葉を遊佐は黙つて聞いている。

「遊佐が困つている時には俺が相談に乗つてやる。遊佐がどんな姿でも、俺は決して拒んだりしない。全部受け止めてやる。」

「・・・」

そして、俺は一際大きな声で言つ。

「だから、安心していい。俺は遊佐の味方だ。」

「・・・」

その言葉を言つた瞬間、遊佐の目からダムが決壊するかのように涙が出てきた。

そして遊佐が、俺の胸に飛び込んでくる。

「言つのが・・・遅いです。私、不安でした。」

「ごめん。」

「もう・・・アオバさんに見捨てられたと思いました。」

「ごめん。」

俺の胸の中で遊佐は泣きながら、必死に搾り出すように言つた。

「でも・・・アオバさんが戻つてきてくれた時、嬉しかったです。それに私を助けてくれるつて・・・」

遊佐が上目使いで俺を見てくる。

「当たり前だ。俺は遊佐の・・・遊佐専属の騎士だからな。」

言つた後に、顔が真っ赤になる。超恥ずかしくなってきた。

「フフッ・・・。アオバさんが私専属の騎士になってくれて少しうれしいです。」

遊佐は笑つていつた。始めてみた彼女の笑顔は可愛らしかった。こうしてみると遊佐も普通の女の子だと改めて実感させられる。

2人で笑いあう。しばらく笑つた後、

「私は・・・先に行きます。もう心残りはありませんから。アオバさんは?」

「俺はもう少しここに残るよ。まだまだ心配なやつらがいるしな。でも、遊佐、本当に心残りはないのか。何でも言つていいぞ。」

「・・・なら、1つだけ。生まれ変わつてまた会えたる、その時は私と一緒に放課後帰つてください。約束です。」

そう言つて、指切りをするように小指を出してきた。俺も遊佐の小指に自分の小指を絡ませ、

「約束する。」

そう言つて、指切りをした。

「・・・まだ、ありがとうございます言いません。アオバさんが放課後一緒に帰つてくれるまで取つておきます。」

「・・・あとよ。」

俺は付け加えるように言つ。

「遊佐はツインテールよりボーネーテールの方が俺は好きだ。」

「・・・今度会つときにはボーネーテールにしておきます。」

そして遊佐は飛びきりの笑顔を、俺が死ぬ前に、みことが見せてくれたような笑顔を、幸せそうにして消えていった。

「・・・絶対に迎えに行くから。」

そつまき、残された俺は屋上から出て行けりドアを開ける。

そこには鶴野の姿が。

「遊佐ちゃんは、消えたんやな？」

鶴野の問いに、俺は無言で頷く。

「わづか・・・。」

「なあ、鶴野。これで良かつたのかな。」

「ワイにはじめが正解かなんて分からへんが、ただ言えるのは遊佐ちゃんは満足したってことや。少なくとも不正解やないと思つで。」

「わづか・・・。」

鶴野の言葉で少しホッとした。

空を見上げる。

満月はまだ上に昇つてゐる。夜はまだまだ長い。

第29話「約束」（後書き）

いかがでしたか？
次回もお楽しみに。

第30話「最高の仲間と共に」

まだ外は暗い。

それなのに俺は廊下を一人で歩いている。向かう先は校長室。いつものように合言葉を言い、部屋に入る。

いつもは戦線メンバーでワイワイ騒いでいた室内も、今は音無、白向、直井の3人しかいなかつた。

「アオバ……どうした?」

日向が声を掛けてくる。

「俺もお前らに付き合ひつこにするよ。」

そう返答する。

「遊佐は?」

音無が聞いて来る。

「消えたよ。幸せそうにな。」

再び静かになる。

そして夜明けが訪れる。

「では……僕らも始めましょ。」

直井が銃を片手に持ち、言った。

「コラコラ待て。お前はいつから俺達の仲間になつた?」

直井の隣にいた日向が言つ。

「ハッ!…今更何を。無能なお前の代わりにだ。忘れたか?クズ。トイレットペーパーのように惨めに消える。」

「なんだとお!…」

直井の暴言に日向が怒る。

その光景を呆れて見ている俺と音無。

「あのなあ、お前ら。奏が頑張ってくれてんだぞ。この隙に全戦線メンバーに会つて回るぞ。」

音無と共に校長室を出る。そこには、

「何だ? どうしたお前ら?」

ひさ子・入江・関根や他の戦線メンバーの姿があった。

「私達はもう良いっていうかね。」

「アンタの話を聞いて納得しちゃつたんだよ。」

「踏ん切りが付いたつていうかさ。」

「そういうグループだよ。」

関根・ひさ子・入江の3人が答える。

「言われなくても分かってたんだけどね。まあボーカルいなく無っちゃたし。」

「岩沢さんとユイの代わりはもういないんだよ。」

「しつかし酷いボーカルだったなあ。」

「毎日が文化祭みたいで楽しかったな。」

「でも、私達以外は大変だぜ。」

「だろうな。」

ひさ子の言葉に音無が口を閉じて呟つ。

「やるんならやりきつてくれ。でないと私達・アンタに説得されただけみたいに成るじゃん。もし、ずっと続いてきたこの戦線が無くなっちまうんだつたらさ・この世界はアンタも含めてその意味を果たしたことになつてさ・いい風になつたんだなつて思えるからさ。ただ一時私達は・ありもしなかつた青春をさ・ただ楽しんでたつて

「とにかくなればそれだけで充分だなって。」

ひたすらの言葉に音無は、

「何言つてんだよ、わかんねえよ。」

笑つて言つた。

「だよな。」

苦笑しながらひたすらは返答する。

「ありがとね。アオバ君。」

入江と関根が俺に言つてくる。

「今までね、凄く楽しかったよ。私達にも、いろんな楽しい思い出を作らせてありがとね。」

「生まれ変わつてさ、会えることがあつたらまた仲良くなれ。」

「ああ！仲良くなれる。」

そして俺は入江と関根と握手をする。

「後のことを任せた。私達はもう逝く。じゃあな。次もまたバンドやる。」

「絶対に好きになる。」「

俺と音無はよう返答した。

誰もいなくなつた廊下。

「下さりものお見送りお疲れ様です。」

「お前絶対性格破綻してゐるからな。」

「破綻などしていない。神に向かつてなれ！」と叫びながら、

いつものように喧嘩し始める田向と直井。

その時、

「……」

バリンンドシャーンと影によつて後ろのガラスが割れ、壁が破壊される。

走つて運動場へ逃げれるが、

「おいおい、こりやねえぜ。」

大量の影が出現していた。

「何だこの数は！？」

「どうなつてんだよ！？」

「NPJは？」

「今この辺じやコイツらしかいないんじや。」

「俺達のやううとしてるこつ分かつてんじやないだろうな？」

音無は影に銃を向ける。

その途端、4、5体の影が飛びあがり音無に襲い掛かる。だが影は空中で真つ一つになり消えていく。そこにいたのは、

「フン、ゲスが。」

ハルバードを持つた野田だった。

「俺達のために戦つてくれるのか？」

「馬鹿なことを言つた。俺が動くのはゆりつへの助けになるときだけだ。」

野田がハルバードを振り回しながら言つた。

「へえ～なる。お前もとことん一途なヤツだな。」

銃で応戦しながら日向が言つた。だが日向にも影が襲い掛かる。だがその影は一発の発砲音と共に消えていく。

「大山……」

そこには校舎の中から狙撃をしている大山の姿が。

「何の取り得も無い僕だけビートで活躍できたら神様もびっくり

仰天かなつて。」

「ああ、見返してやれ。」

今度は右手に長ドス、左手に銃を持った藤巻が俺を襲ってきた影を倒す。

「俺も忘れてもらひつちや困るぜ。」のままになくなつても誰も気がつか無さうだからな。最後に・・・。」

「ほおーほおー！」

藤巻の言葉は坂を駆け下りてぐる男の声で遮られる。

「――」

「Come on come on come on come on come on come on come on!」

そう言つて俺達のところまでジャンプして、やつてきて、近くの影に銃口を向ける。

「Knockin' on heaven's door.」

引き金を引く。

「だんだん役者が揃つてきたな。」

突然、男の声が聞こえたかと思つと、影が数体、2階のベランダから投げ飛ばされる。

さらに、長身の痩せた男がジャンプして運動場に降りてくる。

「何だこの世界はー? 何が起きたつていうんだー?」

「誰!?

「しばらく山籠りしてたんだが、食いもんが少なくてな。」

「松下五段かよー!」

「まあ、何にせよ、助かるぜ。なにせこれだけの手勢だ。」
周りを大量の影にいつのまにか囲まれていた。

「無事に去つていこうぜ。メンバー全員でよーー。」

「ああ。」

「Good bye wild heaven.」

「よし、突破するぞーー！」

第一連絡橋

「どんどん増えてるのかよ？」

下から橋に上つてこようとして、影がやつてきてこる。

「音無、危ないーー！」

音無の背後から影が迫ってきていた。

だがその影は切り刻まれ、音無の背後には椎名の姿が。

「100人だ。100人戦力が増えたと思え。」

「えつ？」

「分からぬのか？お前の意思を引き継ぐ。行けーー！」

「椎名・・・。ああ後は任したぞ。付いて来い、田向、アオバーー！」

「ああ。」

「どー行くんですか？音無さん。」

「本当か？奏。」

「うん、ゆりが危ない。」

途中で天使と合流する。なにやらゆりの身に危険が迫つてこないとい。

「場所は？」

「ギルド。」

そんなわけでギルドに潜入するため体育館に来たのだが、ギルドへの入り口から、影がどんどん出てきている。

「これを突破するのかよーー。」

再び銃やら白刃やら構える。その時、

「伏せるんやーー。」

「どー」からか声がする。「の声は・・・

ドーンと言つ音と共に、大爆発が起こり、ギルド入り口まで一直線に影の姿が消えていた。

「早く行かんかい！！道は開いてやつたでえーー！」
バズーカ砲を持った鶴野だった。

「すまん。」「ありがとよ。」

感謝の言葉を言いながらその道を走つて進む音無達。

「悪い、音無。俺はここに残ることにする。」

音無はその言葉で察したのか、ただ一言、

「やられるなよ。」

「当たり前だ。俺は生まれ変わつてやりたいことがたくさんあるか

ら、やられねえよーーー！」

俺は叫んで言つてやつた。

音無達が完全にギルドへ入つていく。

俺達は、ギルドへの入り口を守るような場所にいる。

「ついて行かんでええんか？」

「戦友を置いていくわけにはいかないんでな。」

「そ、うか・・・お前は最高のヤツだつたでえ。」

「お前もだ。」

そして俺達は、反撃を開始した。

第30話「最高の仲間と共に」（後書き）

いかがでしたか？

次回は最終話の予定です。

次回もお楽しみに。

第31話「むりむし死後の世界」

体育館

「何体倒せば終わるんだよ？」

「さすがにワイも疲れたで。」

音無達がギルドへ入つてけつこうな時間がたつが一向に戻つてこない。

一方、影は倒しても倒しても地面から湧き出でてくる。

「ヤベエ、弾切れだ。」

「ホンマかいな！？」

影に追い詰められていく俺達。

そして影が飛びかかってきた時、

「えつ！？」

空中で影が灰の様に消えていく。

「どうなつてんのやーー？」

「…多分、音無達が何かしたんだと細い。」

「やうか…。」「

「他の仲間が無事かどうか確認しに行こう。」

俺達は仲間達の安否を確認しに向かった。

「みんな無事か？」

「そやな。」「

「そやな。」「

俺達は仲間達の安否を確認しに向かった。

椎名は二つのまにか野田達と合流していた。

「なんとかな。」

「急に影が消えちやつたからビックリしたよ。」

「音無達は？」

「まだギルドにてゐと雖つ。俺は途中で音無達とは別れたしな。」

「そうなの。」

俺の答えに少し不安そうになる戦線メンバー。

「心配するとは無いだろ。あいつらなりゆりを連れ帰つてきてくれるよ。それに立華も付いているし。」

「それもやうだな。俺達は校長室に戻つてあいつらの帰りを待とう。」

「

その意見に反対するものは誰もいなかつた。

校長室

なかなか帰つてこない音無達を待ち続ける俺達。

「大丈夫なのかな？」

不安になっている大山。

「少しほ落ち着きを持って。」

野田が言つ。

「野田にしては落ち着いてるなんて珍しいじゃねえか。一番心配し

てそうなのによお。」

「いや、そうでもないみたいだぞ。」

藤巻の言葉に対し、俺が返答する。

野田は貧乏ゆすりをして、いまかいまかとゆりの帰りを待っている。

「やつぱお前が一番してるんじゃないか。」

「いやあいつもだ。」

俺は鶴野を指して叫ぶ。

鶴野は体をくねらせながら待っていた。

そんな2人を見て椎名は、

「浅はかなり・・・。」

と呟いた。

そんなこんなで時間は進み、校長室のドアが勢い良く開かれた。そして、中に音無、日向、立華、直井の4人が入ってくる。

「ゆりつペは！？」

「ゆりなら保健室で寝てるよ。」

「良かつた。」

戦線メンバーが安堵の声を上げる。

「みんなに一つやつて欲しいことがあるんだ。」

音無のその提案に皆が賛成した。

「ああ。」

「「J」んな感じかな？」

「普通に上手いぞ。」

俺達は音無の提案に乗つて、卒業式の準備をしている。

そして俺は一通り仕事を追え、なにせ「J」のシャーペンで紙に何かを書き込んでいる立華に声を掛けた。

「何やつてんだ？」

「校歌を書いてるの。卒業式には必要と思つて……」

だがなかなか思い浮かばないのか、紙にはほとんど書かれていない。

「でも歌詞を考えるのは難しくて……。」

「立華が思つたまんまの事を書いたらいいんだ。何なら好きなJのことか。」

「それ、いいかも。」

立華が紙に歌詞を書いていく。

「できた……。」

そう言って、俺にできたての歌詞を見せてくる。

なになに……

お空の死んだ世界から

お送りしますお氣楽なんだ

死ぬまでに食つとけ

麻婆豆腐

ああ 麻婆豆腐

麻婆豆腐

斬新な校歌だな。それにしても麻婆豆腐多くないか？

「麻婆豆腐好きなのか？」

「うん。」

「まあ良いんじゃないか。気持ちが詰まってるし。」

すると立華は嬉しそうな表情を浮かべた。

「おーい、終わつたぞ。」

日向たちの声が聞こえてくる。

そして俺達は再び校長室に戻つた。

「俺達はそろそろ逝くわ。」

校長室に着くと、藤巻を先頭に言つた。

「もう何も心残りはねえよ。」

そう言い、次々と消える戦線メンバー達。部屋には彼らの持ち物である、長ズスやハルバード、犬の人形などがそこらじゅうに置かれてある。

「次はワイヤな。」

鶴野が言つ。

「ワイヤはこの世界でいろんな物を見れた。終いにはアオバ、お前に最高のもんを見せてもらつた。ワイヤはそれで満足や。」

そう言つて、俺の方を向き拳を差し出す。

「これからもずっと親友でこよつやないか。」

「ああ。」

俺は鶴野の拳に自分の拳を当てた。

「じゃあな。」

そして鶴野は消えた。

残つたのは俺と音無、立華、日向、直井の5人のみ。

「アオバ、お前はどうする?」

「俺は逝くよ。もつこの世界に未練は無いし、遊佐に会いたいしな。」

「そうか。」

「それとよ、生まれ変わつてもし出会えることがあつたら声掛けてくれよな。俺は遊佐のことで頭が一杯だらうからよ、多分気づけないからよ。」

「バカッフルが。」

日向がからかつてくる。

「日向にはコイがいるもんな。」

「う、つるやこぞ。」

「それじゃあ、逝くから。ありがとよ。」

そして拳を前に出す。

「ひつちこさありがとつよ。楽しかつた。」

「じゃあな。」

「神が見送つてやる。感謝するんだな。」

「一緒に歌詞考えてくれてありがとう。」

俺の拳に、音無、白向、直井、立華の拳があたる。

「じゃあな。」

そして大きな満足感が全身を駆け抜け、ゆっくりと俺は消えていった。

ザーザーと雨が降っている。土砂降りだ。

その光景を学校の昇降口から見つめている少女がいた。

金色のポニーtailをしている少女だった。

その少女は傘を持つていなかそこから動けないでいた。

「ほら、行くぞ。」

その少女に後ろから声を掛ける少年がいた。

少年は少女を自分の傘の下に入るようにする。

「一緒に帰るって約束しただろ。」

その言葉に少女は、それはそれは物凄く幸せそうな笑顔で、

「ありがとう。」

そう言つた。

第31話「そりや -死後の世界-」（後書き）

いかがでしたか？

感動していただけたら私は満足です。

ヤバイ・・・消えるかも？

それではここで御礼を。

今まで読んでいただいた読者の皆様、いつもありがとうございます。
最初から最後まで読んでいただいた方は最後までお付き合ってください
つて、感謝で一杯です。

次は新しい話を書きたいと思います。

その時はまたよろしくお願ひします。

それでは新しい作品を書いた時にまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n94651/>

Angel Beats! ~if~

2011年5月4日16時39分発行